「ごんぎつね」の文学の授業（六年）㈠

――授業の概要――

北　吉　郎
教育学部国語教室

一　はじめに

新美南吉作「ごん狐」は、昭和三十年代以降小学校四年生の国語教科書で採用され、定着し、全国の児童に親しまれている。この文学教材を小学校六年生を対象に実施した授業としては、管見の範囲では西郷竹彦氏による実験授業(1)（「文学理論の学習は可能である」ことを本作品を教材にして〝講義〟した）が、わずかに存在するのみである。言うまでもなく、その授業（というよりは講義に近い）は文芸学理論に基づく読みの方法を児童に理解させることを主なるねらいとしている。

方法を説くことに重点を置くことなく六年生を対象に授業するとき、どのような文学の授業が可能であろうか。又、そこに「感動」が生成されたとき、認識の深化・共感の形成・意欲の向上は、どのようにして形成されていくのであろうか。このような研究課題の下に小学六年生を対象に授業を実施した。よって、本研究は「授業の概要」および「感動形成に関する考察」の二部より成立するが、本稿はこのうち前者に関する論述である。

二　授業を構想し、展開していく上での基本的観点

1　児童文学研究における「ごん狐」研究の成果を、どこで、どのように、資料として提示していくか。

「ごんぎつね」には、「草稿」と称される「原作」が存在する。本作品を読み深めようとするとき、草稿の存在を無視することはできない。従って、この草稿（の重要箇所）を教材として取り入れた授業を組織したい。又、本作品に関しては児童文学研究としての「ごん狐」研究の成果が累積されている。これらの資料を、どの学習場面で、どのように教材化して提示していくか。

2　読みを深化させていく視点（何を読み深めさせるか）

(1)　ごんぎつねの生き方を読み深める。

本作品は、「ごんぎつねの物語」である。そこでは、主人公のごんがどのように生きたかが描出されてある。この主人公の生き方について、小学生高学年の児童なりに考えを深めていくような授業展開を計画したい。

ここで、私自身の作品解釈について述べると、本作品はごんぎつねの生き方（生涯）という視点から区分すると、前後半の構成になっている。

前半部分は、ごんぎつねがいわば疎外された孤独な生き方をしており、この人物の場合は反社会的に生活し、いたずらばかりしている。その内面は生きがい（即ち希望）を持たない陰りのある状態である。この人物が不図したことで兵十と邂逅する。そして、接近を試みる。第三節終わりのここまでが、前半（生）といえる。

後半部分では、兵十に対する接近・一体化への欲求は狂わしくつのり、〈求愛〉心理との近似をうかがわせる。すなわち、ごんぎつねはこの時点で情熱（生きがい）の対象をはっきり保持しており、その生活はかつての孤独で反社会的な生活とは異なり、明るい希望を持った（即ち、新生の）生き方を推察させる(2)。ごんぎつねのこの生まれ変わりを読み取れるか、という問題がある。

ごんぎつねは、その短い後半生を〈求愛〉により燃焼させることになるが、最期の場面における「ぐったりと目をつぶったまま、うなず」く心情を六年生の児童はどのように読むか、という大きな問題がごんぎつねの生き方に関しては存在する。

(2)　兵十の生き方を読み取る。

他方、この作品は「兵十の物語」でもある。このことは、草稿の〈前文〉を読むことで明瞭になる。すなわち、幼少の頃の作者に話を聞かせてくれた茂助爺という語り手が、実は若き日の兵十その人であるという可能性を暗示しているのである。とすれば、兵十に関しては終末場面での「火なわじゅうをばたりと、取り落とし」たときの心情に加えて、「若い時、猟師」であったとされる茂助爺（兵十当人である可能性大）が、その後にどのように生きたのか、そして現在、どのような思いを込めて「ごんぎつね」の物語を作者を含む子どもたちに語っているのか、という大きな問題が出てくる。この点を兵十の生き方に関する問題として読み深めたい。

(3)　ごんぎつねと兵十の生き方に対し批判的に読み、作品を鑑賞する。

このような悲しい事件を避けることはできなかったのか。ごんぎつねと兵十の何が問題であったのか。自分ならばどうするか。又、このような事件は自分の身の回りや世の中のできごとと無関係であるのか、について彼らなりに考えさせ作品鑑賞をさせたい。

以上が、読みの内容に関する視点である。次に、

3　「感動」形成過程を考察する。

文学の授業を行うことによる種々の価値（学習効果）のうち、最も重要な価値は「感動」形成にあると考える。その「感動」は学習中の「熱気」により観察するか、あるいは感想文等の記述によりうかがい知る以外に判断の手立てはない。

学習過程の中で形成されていく「感動」とは何か。これを私は「認識の深化」「共感の形成」「意欲の向上」において把握しようと努める。よって、本授業では第一次から第五次にわたり感想文を記述する学習活動を組織した。又、読みの学習における児童の意識を知ることができるように、各時間の授業終了後に「一口感想」を記述させた。これらを分析し、文学教材「ごんぎつね」の学習において形成される「感動」について、全体的かつ個別的に変容過程を明らかにしようとする（なお、この考察については、別稿「『ごんぎつね』の文学の授業（六年）(二)――『感動』の形成過程に関する考察――」において詳述する。）

三　授業の概要

実施時期――一九八四年十一月
授業時数――全十四時間
児童数――三十二名

(一)　指導過程一覧

	実施日	時数	読みの内容	資料	感想記述
読みの構え	11月5日(月)	第1時	題名の由来、作品の舞台について理解を深め、範読を聞く。	①②	「一口感想」
		第2時	初発の感想を書く。		第一次感想文
方向づけ	11月6日(火)	第3時	第一節（「小川のつつみ」まで）	③	「一口感想」
生き方深め	11月7日(水)	第4時	第一節（最後まで）	④	「一口感想」
のみ読み	11月8日(木)	第5時	第二節	⑤⑥⑦	「一口感想」
ねがいつ	11月9日(金)	第6時	第三節		「一口感想」
ぎんぎつねに	11月10日(土)	第7時	〈前半〉部分の学習について感想文を書く。	⑧⑨	第二次感想文「一口感想」
	11月13日(火)	第8時	第四節		「一口感想」

㈡　各時間の授業内容

1　十一月五日（月）第一時――題名の由来、作品の舞台について理解を深め範読を聞く。

(1)　「ごんぎつね」の題名の由来、作品の舞台について知る。――25分

(2)　範読を聞く。――20分

(3)　「一口感想」を書く。

〈資料提示〉

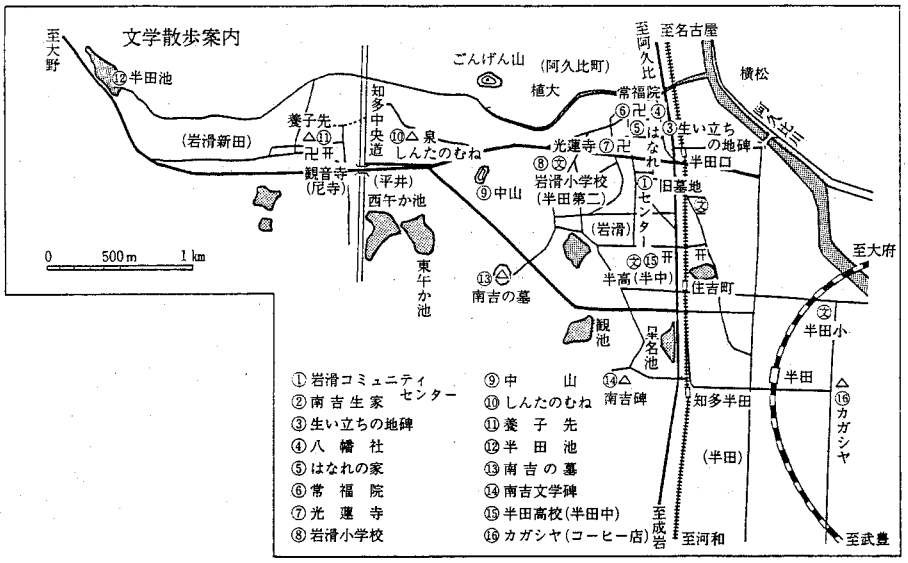
①　「大石源三」説の紹介（浜野卓也『新美南吉の世界』新評論　一九七三年六月　より）

愛知県の知多半島の岩滑という所に、小さなお城（中山城）の跡があって、この城跡近くに「ごんげん山」という山がある。この「ごんげん山」に大正時代の末頃、大きな狐が住んでいて、しばしば村里に出てきて、姿を現した。この狐は死んで、今では祠を建てて祭ったといわれる狐塚がある。

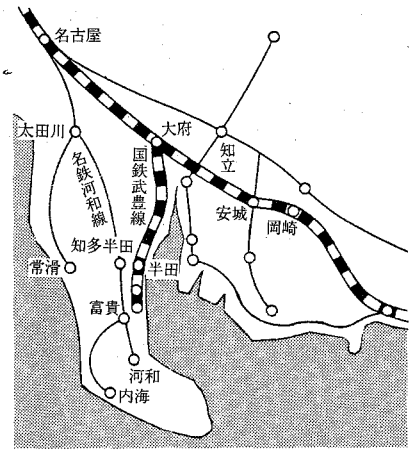
読みの整理	兵十の生き方について読み深める		ごんぎつねの生き方について読み深める	
11月22日(木)	11月21日(水)	11月20日(火)	11月15日(木)	11月14日(水)
第14時	第13時	第12時	第11時	第10時	第9時
作品を批判的に読み、鑑賞する。	「その後の兵十」で感想文を書く。の題	草稿の〈前文〉をくわしく読む。	第六節（「火なわじゅうをばたりと取り落とし」た兵十の心情）	第六節（「ぐったりと目をつぶったまま、うなずいたときのごんの心情を想像して、感想文を記述する。）	第五節
					⑩⑪⑫⑬⑭⑮
第五次感想文	第四次感想文	「一口感想」	「一口感想」	第三次感想文	「一口感想」

②　「南吉文学散歩地図」（作者が生まれた場所、「中山」・「村の小川」・「小さなおしろ」等の位置。――大石源三「南吉のふるさと」岩滑コミュニティセンター発行）

資料①



資料②



〈教師メモ〉

指導の順序としては、まず「ごんぎつね」を学習していくことを知らせる。児童は本作品については四年生で既習している。そこで、題名の由来、作品の舞台に関する資料説明を行い、導入とした上で範読した。物語の筋を熟知している教材を再読する場合、飽きられやすく、白けた雰囲気に陥りやすいのであるが、範読に対して真剣に聞き耳を立てていた。これは、「大石源三」説の紹介に児童の興味が動き、瞳の輝いたことと関連しているように推測される。児童はこの物語を四年生で学習し、ストーリィを承知している。加えて、六年生になると、いわゆるつくり話だという意識が強くなってくる。（だからと言って、虚構性そのことを前提として文章表現を味読するという言語能力発達段階に多くの児童が至っている訳ではない。）このような発達階上にある児童にとって、題名の由来・資料提示をしたことは、全くのつくり話ではなさそうだ、という関心を引き付けることになったように推測される。

2　十一月五日（月）第二時――初発の感想文を書く。（第一次感想）

(1)　第一次感想文を記述する。――25分

(2)　第一次感想文を読む。（教師）――20分

（全員の記述文を読んでやり、疑問点や課題を取り上げて共通のものにしていく。）

〈教師メモ〉

①　第一次感想文の分析（感想内容については、本稿末備の〈備考〉(1)に第二次感想文と比較させる形で掲載している。）

ア　語句の意味についての疑問が多い。

イ　不正確または誤読に基づく記述が多い。

・「菜種がらをちらかしたり」　・「大きなふなが入って」　・「顔をかみ切って」　・「三か月ほどたってから」等。（傍線部、問題箇所）

ウ　漠然とした読み取り――記述が具体的でない。

・「あんなことしたから、ごんはこうなった」　・「ごんは、いろいろなことを知っているから頭がいい」等。（傍線部、問題箇所）

エ　あらすじの把握にとどまっている。

オ　表面的で、浅い読み取りになっている。

――記述内容に突っ込みが足りない。

・「うたれてかわいそう」　・「最後に兵十にじゅうでうたれたのが、かわいそうだった」　・「かわいそう。別に殺すことはなかった」等。

カ　感想内容が第三者的である。――登場人物の心情に分け入った読みが形成されていない。

・「ごんは、うたれたしゅん間、どう思ったのかなあ」　・「ごんは、どんな気持ちで死んでいったのかなあ」等。

キ　「ひとりぼっち」の境遇についての記述が少ない。

（従って、「いたずら」をするごんぎつねに対し「悪い」「悪いことをしすぎる」「悪いきつね」というような把握のし方や、「いいこと」←「悪いこと」という対立的・図式的な捉え方になっている。詳

細には、別稿「『感動』形成に関する考察」で論及する。）

②　四年生のときの学習に関連した記述内容（15名）

ア　四年生のときの学習を想起している児童（10名）

- 何となくおぼえていたのと一致していた。（鴨谷）
- 四年生のときに習ったので少ししかおぼえていないけど、今日先生が読んだので思い出した。（加藤）
- ぼくがおぼえているのは、くりを持って行くところと、「ドン」とうたれるところと、「兵十」の名前でした。（村尾）
- 「ごんぎつね」を聞いて、最初こんな話だったかなあ、と思った。でも、聞いているうちに思い出してきた。（徳山）
- 少し忘れていたけど、読んだら半分以上おぼえていました。（宮本）
- だいたいのあらすじはおぼえている。でも、忘れているところもところどころあった。（増田）
- 四年生のとき学習したから、だいたいのあらすじはおぼえていた。「ごんぎつね」の作文をたくさん書いた。意味の分からないことばがあった。（大山）
- 三年か四年のとき、長い時間をかけて学習したことをおぼえている。（松本）
- はっきりと、おぼえていない。てっぽうでうたれて、「かわいそう」ぐらいしか感想は残っていない。（山下）
- 四年生のとき、一回勉強したし、聞いたこともあったけど、あまりおぼえていなかった。（村上男）

イ　二度学習することに対して抵抗感を表明している児童。（4名）

- 一度勉強したので、あまりおもしろくない。（村上女）
- 一度学習しているので、話の内容もだいたい分かっていたので、聞いてもおもしろくなかった。（笠原）
- 「ごんぎつね」は四年生のときに習っているから、あまりおもしろくなかった。六年生になって、なんで習うんかと思った。（西浦）
- 四年生のとき、一回勉強したから、あまりおもしろくなかった。なんで今ごろ勉強するんかなあ。この話はいい話だけど、二回勉強してもおもしろくない。（小松）

ウ　かわいそうな話だから、学習することに対して抵抗感を表明している児童（1名）

- この話はかわいそうだから、読んだりして勉強するのはいや。（樺山）

（注）

。この学年の児童は、四年生時には七クラス編成であった。当時の学習の取り組みに甚だしい差異が認められるのは、そのためである。

。学習に対して抵抗感を表明しているイ・ウの感想内容については、その変容過程を別稿「『感動』形成に関する考察」で詳述する。）

3　十一月六日（火）第三時――第一節（「村の小川のつつみ」場面まで）

(1)　指名音読（二つの部分に区切る。）

(2)　読み深める。（グループ学習形態）

①　ごんぎつねは、どこの、どんなところに、どんなふうにして、住んでいたか。

②　ごんぎつねはどんなきつねだったか。

③　雨の日の様子。しゃがんでいるときの気持ち。

④　穴の中から出てきたときの外の様子。ごんの心情。

⑤　雨後の小川の様子。

(3)　全体学習の場で話し合う。

(4)　「一口感想」を書く。

〈資料の提示〉

① 草稿「前文」

資料③（『校定新美南吉全集』第十巻　大日本図書　一九八一・二）

權狐　「赤い鳥に投ず」

茂助と云ふお爺さんが、私達の小さかつた時、村にゐました。「茂助爺」と私達は呼んでゐました。茂助爺は、年とつてゐて、仕事が出來ないから子守ばかりしてゐました。若衆倉の前の日溜で、私達はよく茂助爺と遊びました。

私はもう茂助爺の顔を覺えてゐません。唯、茂助爺が、夏みかんの皮をむく時の手の大きかつた事だけ覺えてゐます。茂助爺は、若い時、獵師だつたさうです。私が、次にお話するのは、私が小さかつた時、若衆倉の前で、茂助爺からきいた話なんです。

一

むかし、徳川様が世をお治めになつてゐられた頃に、中山に、小さなお城があつて、中山様と云ふお殿さまが、少しの家來と住んでゐられました。

〈教師メモ〉

語り手である「茂助爺」がごんぎつねを撃ってしまった若き日の兵十の可能性がある、という教師の発言に、児童の顔が真剣になった。（ゆさぶられた。）ということは、直接に話を聞いた相手が兵十その人である可能性が高いことにより、物語の内容に迫真性の生じたことを意味するのであろうか。とにかく、「ゆさぶり」のない授業では児童がだらけやすく、学習に対して真剣味を帯びてこない。

4　十一月七日（水）第四時――第一節（最後まで）

(1) 指名音読（四つの場面に分ける。）

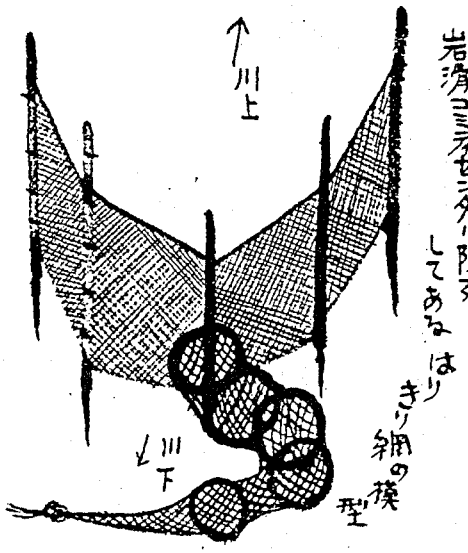
(2) 読み深める。（グループ学習）

① 兵十の様子→人がらについて考える。

② 「はりきり網」の構造と使用法。

〈資料の提示〉

資料④（「新美南吉を語る――ごん狐のふる里」劇団前進座青少年劇場発行　一九八一・三）



〈教師メモ〉

① 読み深める学習は、四場面ともグループ学習で行った。子どもたちは、その方が活発に取り組めるように思われる。多くの児童が積極的に発言していた。（「一口感想」の中に、「グループの中で話し合いをした方がよく分かる」「発言できてよかった」「発言する時間がなくて残念だった」等、グループ学習に関する記述が多く出てきている。）

毎時間、「一口感想」を記述させることで、読み深まっていく過程や学習心理を把握できる。又、「一口感想」に朱書して返却することにより、一人一人の読みの心理に対応してやることが可能となり、学習意欲の向上化につながる。

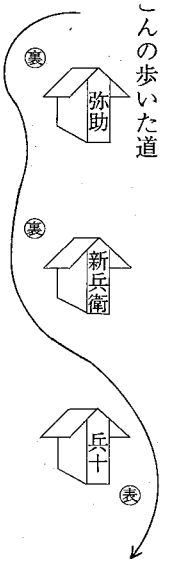
② 十数時間におよぶ長丁場の読み深めの学習では、教材がすぐれているからといってそれだけで充実した授業が持続できるというような単純なものではない。「授業が楽しい」ということの裏面には「よく分かる」だけでなく、「この先どんなことになるのだろう」という期待感や「ゆさぶり」による緊張感の持続が毎時間不可欠のこととして要請される。

5　十一月八日（土）第五時――第二節

(1) 指名音読（六つの部分に分ける。）
それぞれの段落を各グループに割り当てて、斉読させる。

(2) 読み深める。（グループで）
全体学習で確認する。

(3) ① ごんは、どうして「村に何かあるんだな」と思ったのか。（第一段落）
・「おはぐろ」
・「かみをすいて」　お化粧
・ごんの歩いた道



② 「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」の続きの文を想像して書かせる。（第二段落）

③ ・ごんは、何のために墓地へ行き、六地蔵さんのかげに隠れているのだろう。→たしかめるため。（好奇心が非常に強い。）
・「ひがん花が、赤い布のように、さき続いて」→イメージ化できるか。（第三段落）

④ 「ひがん花がふみ折られていました」から、どんなことを考えるか。（第四段落）

⑤ なぜ、「死んだのは兵十のおっかあだ」と思ったのか。（第五段落）

⑥ ごんぎつねの人物像について（「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった」）→反省心が強い（第六段落）

(4) 「一口感想」を書く。

〈資料の提示〉（「新美南吉を語る――ごん狐のふる里」――前掲資料――より）

① 「赤い井戸」

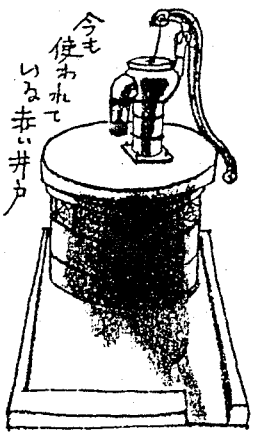
資料⑤

それから、これは間違いではないんですが、「ごん狐」という作品を正しく理解して行く為には、文中に出て来るいくつかの言葉などについても、正しく理解しておいて頂いた方がいい。それについては語注がありますので、それを読んで頂くとわかります。

例えば、従来よく問題になったのは、赤い井戸ということばです。赤い井戸って何だという疑問です。確かにスラスラと読んでいると、何げなしに読み飛ばします。けれども、改めて聞かれたら、一体赤い井戸って何だろうとやっぱり思います。これは、現地でその井戸をご覧になりますと、たちまち永解しますけれども、赤いというより実はこげ茶色といいますか、チョコレート色の土管なんです。

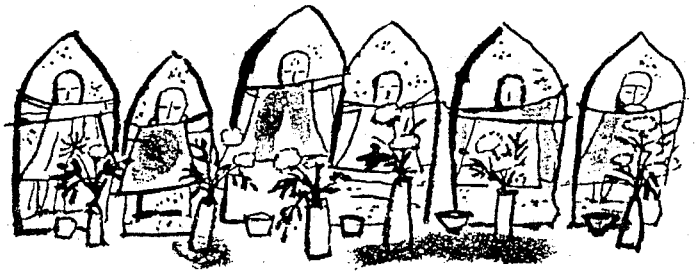
これがどういう点で意味を持っているかといいますと、御承知の様に、瀬戸とか知多半島の方は、昔から焼き物・瀬戸物の産地ですね。ところが同じ焼き物でも土の質だとか焼き方によって、上質のものとか、大衆的な安いものとかいろいろ出来る。

つまり、こげ茶色の土

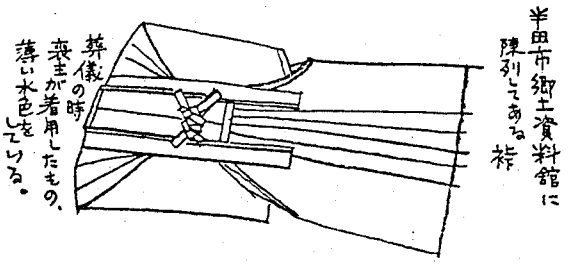


管の井戸というのは、一番安い土管なんです。という事は、その井戸を使っている兵十という家の経済的なレベルを示している訳です。だから、兵十は貧乏だったとかひと言も書いてませんけれども、赤い井戸を使っているという事で、兵十の生活のレベルというものがわかる。

②「六地蔵」　資料⑥



③「かみしも」　資料⑦



＜教師メモ＞

① これらの資料で、最も児童の心をゆさぶることになったのは「赤い井戸」である。

この井戸については、第五節でも「いどのそばにしゃがんで」とあり、この吉兵衛の家の井戸も「赤い井戸」かどうか議論になった。「赤い井戸」は、児童の意識に強い印象を与えたようである。

② この場面では美しい情景（自然）描写（「ひがんばなが、赤いきれのように、さき続いて」等）が出てくるが、六年生でも多くの児童にとって情景描写の鑑賞は興味・関心が低いように思われる。

6　十一月九日（金）第六時――第三節

(1) 指名読み（四つの部分に分ける。）

(2) 読み深める。（グループ学習）

① ・兵十の家族構成や年齢について考えさせる。

・「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」――これまでのごんの境遇と、兵十の境遇を対比させる。（おれもひとりぼっち、兵十もひとりぼっち）（第一段落）

② ・いわし売りと、ごんの行動を動作化――興味づけ――

・ごんは、どうしていわしを盗んだか。（第二段落）

③ 「そっと物置の方へ回って」くりを置いて帰ったごんの心情（第三段落）。

④ 「次の日」も「その次の日も」「その次の日には」――何日間にわたる行為か。

また、その理由。（第四段落）

（板書）

	行為	心情
第一日	いわしをぬすむ	「うなぎのつぐないに、まず一ついいことをした」
第二日	くりをどっさり拾って	「かわいそうに」、あんなきずまで
第三日	くりを拾って	――
第四日		――
第五日	くりばかりでなくまつたけも	――

(3) 「一口感想」を書く。

〈教師メモ〉

① ついに、K児のことで怒ってしまった。（学習時間中に、故意に前席児童の背中を鉛筆の先で何度も突付いて振り向かせ妨害を加えていたため。）日頃から、殊に文学の授業では児童が楽しんで取り組めることを第一に考えて、怒ることがないように心掛けてはいるのだが……K児は最近グループを形成し、クラス集団を攪乱させる傾向が出てきている。学習中ではあるが、やむを得ず厳しく叱責した。小学校では、このように教科学習中とはいえ、中断し、学級指導的に注意を促す場面がしばしば出来る。

7 十一月十日（土）第七時――前半部分の学習について感想文を書く。

（第二次感想）

(1) 学習のめあて（感想文を書くこと）を知らせる。

(2) 範読する。――資料の草稿「前文」を含めて、〈前半〉の学習部分を読む。

(3) これまでの学習で、漏れていた点を付加する。

① 「うなぎ」→滋養があり薬になること。

② 「こちらの物置の後ろから見ていた」（そのほか「弥助というおひゃくしょうのうちのうら」「かじ屋の新兵衛のうちのうら」「六じぞうさんのかげ」「うら口からのぞいて見ますと」）

→人間の側に近づくことができない（キツネの立場にある）こと。

(4) 「一口感想」を書く。

〈資料の提示〉（前掲『校定新美南吉全集』第十巻より）

資料⑧

私の友だち

私の友だちは四年級みな友だちです。

私は毎日徳三君と遊ばない事はありません。毎日仲よく徳三君と遊んでゐます。ぎすをとらまえにゐつたりざいしょへいつてかるたをしたりトランプヲ（ママ）したりして遊んでゐます。

資料⑨

冬ノムジナ

冬ニナツタノデ寒クナリマシタ。

コノ頃モネテヰルトムジナガ鳴キマシタノデ僕ハフシギニ思ツテ「オ母サンムジナハナゼ冬ニナルト鳴クノデスカ。」ト尋ネテ見タ、オ母サンハ笑ヒナガラ「ムジナハ寒イノデ鳴クノデセウ。」ト言ツタノデ僕ハナル程ソウダナアト思ツタ。

スルト僕ノ弟ハチ、ヲスウノヲヤメテ「兄チャン、ムジナハ寒イノデオ宮ノ森ノ中ノ穴ノ中デ鳴イテヰルノデセウ。」ト言ツタノデ、僕ハ弟マデアンナコト言ツテクレルノデ「ソウダナアムジナハ寒イノデセウ、ネえ（ママ）マアーチャモウ早クネマセウ。」ト言ツテヤツタノデ弟ハ眠ムツタ。

終

〈教師メモ〉

① 資料⑧は感想文を記述することとの関連性は希薄であるが、小学四年生のときの作文を通して生活の一面を紹介することで、作者に対して親しみを抱かせることにつながればよいと考え提示した。又、文中に「キス」の記事が出ており（「ぎす」）、教材文との関連性を見出す

ことができる。

② 資料⑨は児童に対しては説明していないが、冬季の寒空の下をさまよい歩くケモノに対する少年時代の作者の哀感がにじんでおり、「ごんぎつね」の作品世界と必ずしも無縁ではないと思われ提示した。

③ 第二次感想文の分析（感想内容については、末尾の〈備考〉(1)を参照。）

第一次感想文との比較からその主なる特徴点を指摘すると、次のようになる。（認識の深化、共感・意欲の形成過程についての分析は、別稿「『感動』形成に関する考察」に詳述。）

- 記述が具体的で、細部にわたってくる。
- 感想量が増大する。

ア 叙述の細部表現を正確に把捉できるようになる。

- 「きす」・「おはぐろ」・「赤い井戸」・「白いかみしも」・「顔の横っちょうに、まるいはぎの葉が一まい」等。

イ 「いたずら」の行為の内容や質を正確に把捉できるようになる。

- 「なたねがらのほしてあるのに火をつけ」・「はりきりあみより下手の方」等。

ウ 「ひとりぼっち」の境遇に対して、同情や共感が形成されてくる。

従って、「いたずら」の行為については、ひとりぼっち→さびしさ→いたずらとしての把握が可能になってくる。

エ ごんの人物像を多様な側面から把捉できるようになる。

- 「ひとりぼっち」の境遇
- 「小ぎつね」（年齢）
- 「いたずら」の悪質ぶり
- 責任感の強さ――兵十のお母さんの死を自分の責任として感じている。
- やさしさ
- 頭のよさ
- 好奇心の強さ

8 十一月十三日（火）第八時――第四節

(1) 前々時の学習を想起し、今後の学習課題を見出す。（グループで話し合わせる）

① 兵十のためにくりやまつたけを持って行くなどの行為――五日間

- 何のために、五日間も持って行ったのか。→うなぎの「つぐない」
- 「つぐない」のために、五日間も持って行かなければならなかったのだろうか。

ごんは、どうして何日も何日も、くりやまつたけをとどけるのだろう。

(2) 三つの段落に分けて、くわしく読み深める。

(3) グループで音読。全体で音読。

(4) 「一口感想」を書く。

〈教師メモ〉

(1)の学習活動で話し合った結果を板書し、もう他にはないかどうかということを念頭において、以後の学習をすすめていくこととした。

（板書）

ごんは、どうしてくりやまつたけを毎日とどけるのだろう。

1 うなぎのつぐないのため。
2 「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十」だから。
3 [　　]

9 十一月十四日（水）第九時――第五節

(1) 学習のめあてを知る。

「こいつはつまらない」「神様にお礼を言うんじゃあ、おれは引き合わない」と独白するごんの心情について、なぜそのような気持ちになるのか考えることを知らせる。

(2) グループで音読。

(3) くわしく読む。

①・「ごんは、おねんぶつがすむまで、いどのそばにしゃがんでいました。」→どのくらいの時間か。また、どうしてか。

・「兵十のかげぼうしをふみふみ」→なぜ、「兵十」のかげぼうしなのか。（第一段落）

②「どうも、そりゃ、人間じゃない。神様だ。」→加助は、どうしてそう思ったのだろう。（第二段落）

③ なぜ、「こいつはつまらない」「神様にお礼を言うんじゃあ、おれは、引き合わない」と思ったのか。（第三段落）←→草稿を提示（話し合う）。

(4) 「一口感想」を書く。

〈資料提示〉

① 〈神様にお礼〉場面の草稿（前掲『校定新美南吉全集』第十巻より）

資料⑩

権狐は、つまんないなと思ひました。自分が、栗やきのこを持つて行つてやるのに、自分にはお禮云はないで、神様にお禮を云ふなんて。いつそ神様がなけりやいいのに。

権狐は、神様がうらめしくなりました。

② 半田中学校、代用教員時代の日記（拙稿「『ごん狐』の誕生――兵十とM子――」＝『言語表現研究』第一号　昭和58・3より）

資料⑪（中学三・四年生）

初恋の予感	
1・2	・彼方よりM子の祖父の来たるを見、何故か隠る。〈中略〉彼と会ふと恥しさを感ず。
1・4	・計らずもM子が来る。余は、彼を見た時、どんな感に掩はれたことか。あの感は好ましい感だ、けれど良い感ではない。

資料⑫（中学五年生）

（『昭和四年自由日記』傍線引用者）

	恋の苦痛・やるせなさ				あきらめ（きれない）			
	5・28	6・11	6・16	6・27	7・11	7・15	7・16	8・3
あれが悩みと云ふものだらうか。余の全身の血液は、熱をましし……	・有難いかな、俺のラヴはバイデグリー薄らいでいくやうだ。	・おねがひだから、なくなってくれ。けんざいのらヴ――いせいにたいするらヴ。	・まいらヴ　まいらヴ　きえてなくなれ！ぱっと、あいやるせなや。	・Yet I must love her.〈中略〉俺は、常から、胸の中の火をもみけさうとあせってゐた。	・さめさめとこそ泣かまほしけれ。	・けれど、俺の空想のたどりつく所は、しつれんでないか。	・her skin に頬を当てゝわけもなく泣きたい様な感情。	・力なさ。やるせなさ――そしてうついう

資料⑬（代用教員時代）

（『スバルタノート』）

2・14	・我が口はくさしときけば女とは横をむきつゝ話するかも
2・14	・かくもよはき男にしあればこの恋をうちあけむとき泣かむと思ふ
2・15	・白く白くすさびていきし生活をふかく思へば女かゝはる
4・17	・私には、恋人に（まだ打ち合けていない恋人）話をしかけるの

4・28	は苦痛である。
	• A×A（私のラバーの弟）が、昨日ランニングをして、足をいたくした〈中略〉帰り途、思ひきって、A×Aの家を訪れてみた。
5・1	• 私が子供達に教へた「まゝごと」の楽譜をもらって来てくれよとM子が云ったとAが云った。〈中略〉自分は叮ねいに楽譜をうつしてやった。〈中略〉こんなことで、私はM子と近けるかしれない。
5・7	• ふり返ってみると、まだ遠くの方に白い顔がこちらを見てゐた。〈中略〉それは登校の途。白い顔はM子！私のM子は、M子の弟と一緒に行く私を、見えなくなるまで送ってゝくれた。
5・11	• Aを通じて、M子に頼んで置いた、「ポンポコ狸」の譜を、Aが持って来てくれた。〈中略〉つまみ出して見る。手紙だ。〈中略〉中に「新美先生」とかいてある。〈中略〉――「新美先生」なんて云はれては困ります。僕はさみしくなります――と夜の手紙に書いた。
5・26	• A×Aの話――学芸会でやる事を、姉さんに話したら、姉さんは笑ってゐた。―
7・1	• 僕等のランデヴーのこと。あなたは、土・月曜に出られるってね。〈中略〉しかし、難関は、場所である。あなたは何かよいお考へは持ってゐられないか。僕も考へる。（『少年少女ダイアリー』）
7・2	• 土曜の朝、に返事を下さい。かんたんでいいんです。たゞ、僕等が、逢って話しあふ時と、所とをしらせて下されば。（「代用教員の日記」）
7・8	• あなたのお母さんが、あなたの恋愛に自由を与へて下さらない事は、〈中略〉あゝ、遂々、あなたは、「あなたのaa」と書かれた。それでは僕も「僕のaさま」と書かう。そして、「あなたの正八」と書かう。（『少年少女ダイアリー』）
7・11	• 家に帰った今、またふでをとる。〈中略〉こんど、いゝ機会が僕等を逢はせてくれたら、〈中略〉二度目のランデヴーの機会の拾へることを祈ってゐる。（「代用教員の日記」）

（「代用教員の日記」傍線引用者）

資料⑭（代用教員をやめた直後）

9・12	• ランデヴー　云ひたきことの云はれざる、気の毒なほど草むしりけり
	• わが口は悪臭すなり恋人とキッスすることあきらめにけり
	• 煙草すへば、口の悪臭とれるかと、あひびきのまへ煙草吸ふかな
9・18	• 恐き顔と、恋人は吾を思はんか――鏡をのぞきひげつまみをる
	• この恋はこはれむなれどされどされど、我は恋ふるもいもを恋ふるも

（『スパルタノート』）

〈教師メモ〉

① 学習活動(3)の①は、兵十に対して「傾斜」してきているごんの心理について考えさせるため。「兵十のかげぼうしをふみふみ」に対する児童の反応は、次のとおり。

- 兵十の様子をさぐるため。
- 兵十の影が、ごんの方へ流れていたから。
- 真後ろだから、見つかりにくい。
- 加助に対してはあまり悪いことはしていないが、兵十にはひどく悪いことをした。兵十に見つかったら殺される。

すなわち、この点に関しては〈求愛〉としての読みは全く出てきていない。

② 学習活動(3)の③については、草稿を提示して話し合ったところ、草

稿の文章表現の方がこの場面のごんの心情にふさわしい、と考える児童が多いのに驚かされた。（児童の感情としては、草稿の方が自然な形で受け止められるようである。このような感じ方は小学四年生でも同様である。（拙稿「『ごんぎつね』は子どもたちにどのように読まれているか」＝『国語科教育』第32集　昭60・3　P・37　参照）

この場面の授業記録を抄出してみる。次のとおりである。

――（「こいつはつまらないな」「神様にお礼を言うんじゃあ、おれは、引き合わないなあ」の表現に関し、このようなごんの反応に対してどのように考えるか、グループでの話し合いの結果を発表し合うところから）――

教師　グループで話し合ったことを発表してもらいます。

赤沢　兵十は神様に対してお礼を言えばいい。そのことがいやなら、ごんはくりを持って行くのをやめたらいい。

鴨谷　この文章だと、ごんはつぐないのためではなくて、まるでお礼を言ってもらうために持って行っているみたい。

宮本　そう。兵十にお礼を言ってほしいから、ごんは「引き合わないなあ」と言っていると思う。

教師　なるほど……つぐないのためだったら、「つまらない」とか「引き合わない」というのはおかしい、と言うのですね。そうなると、ごんの心の中ではうなぎのつぐないの他に、どんな気持ちが混じり合っているんだろうか？

阿河　ごんは、いつも悪者みたいに見られているだろう。だから、おれだっていい所があるんだ、ということを知ってもらいたい気持ちが強い。

牧野　ごんは兵十のことが好きやから、今までは悪いことばかりしてきたけど、こんなやさしいところもあるということを知ってもらって、いっしょに暮らしたいとか……

教師　「好きやから」というのは、「おれと同じ、ひとりぼっち」ということと同じ意味かな？　それとも違ってる？

阿河　だから、気が合うということ。

教師　じゃあ、ちょっと聞くけど、兵十を好きだからくりやまつたけを持って行ってあげてると思う人は、どのくらいいるのかな？（挙手、四・五名）。そうじゃなくて、そんな感じは全然しないという人は？（挙手五・六名）。その他の人は、どうしてほしいという気持ちから、「つまらないなあ」とか「引き合わないなあ」と言っている、と考えているのかな？

北垣　友達になってほしい。

石原　兵十にくりやまつたけをあげているのは、この自分なんだ、ここにいる自分だ、という気持ち。

教師　なるほど。うなぎのつぐないのためだけで、くりやまつたけをとどけているんじゃない、ということがよく理解できました。

実はね、この作品が教科書に載るようになる以前に、南吉はこの場面をどのように書いたらいいのか悩んで、最初はね、このように書いていたんです。（草稿を板書して提示）

（板書）

資料⑮

ごんぎつねは、つまんないなと思いました。自分が、栗やきのこを持って行ってやるのに、自分にはお礼言わないで、神様にお礼を言うなんて。いっそ神様がなけりゃいゝのに。

ごんぎつねは、神様がうらめしくなりました。

君たちは、教科書と比較してどちらの方がいいと思うかな？　どちらが、この場面のごんの心情にふさわしいと考えるかな？　……

――（間）――

やはり教科書の方がよいように思う人？

（挙手、二一・三人）。黒板の方がいいと思う人？（挙手、多数）。どちらとも言えない、という人は？（挙手、一名）

では、理由を聞いてみますよ。まず、教科書よりも黒板の方がいいという人から。

倉木　ごんの気持ちって言うのは、とてもつまらない気持ちでしょ。神様さえいなかったら、自分のことを兵十に知ってもらえる。

村上㈫なんというか、黒板の方はごんの気持ちをくわしく書いている感じ。

牧野　ごんはいたずら者で、ひねくれ者だから、こっち（黒板）の方が似合ってる。

石戸　黒板に書いてある方が、自分の心情が素直に表現されているような気がする。

小松　黒板の方は、ごんぎつねが神様より偉いような感じがしていいと思う。自分がいいことをしているのに、神様のせいにされたら、だれだってうらめしく思うのは当然だ。

樺山　ごんは、自分が一人ぼっちで、人に分かってもらいたくていたずらをしているんでしょう。だから、ここでも自分のことを理解してもらえないのだから、黒板の方が自然な感じ。

教師　逆に、教科書の方がいいという人の意見を聞かせてください。

山下　教科書の方が慣れているし、黒板の方だと、ごんが憎たらしいキツネに思われてくる。

徳山　ごんは、たしかにひねくれているところがあるかもしれないけど、やさしいところもあるから、教科書の方がいい。

教師　他には、どうですか？（挙手なし）。それでは、どちらとも言えないという人に発言してもらいましょう。

笠原　みんなの意見を聞いているうちに、黒板に書いてある方がごんの気持ちをくわしく書いてあるし、ピッタリと合っているような感じがしてきた。

教師　数の上から見ると、黒板の方がごんの気持ちを適切に表しているという意見が多いようです。又、みなさんの意見を整理すると、ごんはうなぎのつぐないのためだけでくりやまつたけをとどけているのではないようです。

――（以下、略）――

③　資料⑪⑫⑬⑭は、右の授業の流れの中で最後に提示した。残り時間が少ない中で、この資料と関連して、東京の大学進学を許されずに地元の師範学校を受験し、結核のために不合格となり代用教員をしたこと、その頃に本作品を執筆したことを慌ただしく説明した。

10　**十一月十五日（木）第十時――第六節（「ぐったりと目をつぶったまま、うなず」いたごんの心情を想像して感想文を記述する。）（第三次感想）**

(1)　前時に児童が書いた「一口感想」を読む。（教師）

(2)　本時の学習のめあてをつかむ。

(3)　音読する。（二つに区切って読ませる。）

(4)　くわしく読む。（四つの部分に区切る。）

①・「その明くる日も」

・「兵十は、物置でなわをなっていました」→ごんの心情（第一段落）

②　「ふと」「きつね」「入ったではありませんか」「ごんぎつねめ」（第二段落）

③・「兵十はかけよって来ました」→誰のところに。（←→「かけよって行きました」）

・「くりがかためて置いてある」（第三段落）

(5)　これまでの学習を振り返り、「ぐったりと目をつぶったまま、うなず」いたごんの心情を想像して感想文を書く。

兵十から、「ごん、おまえだったのか。いつもくりをくれたのは。」

と言われてうなずいたごんの気持ちを、次の指示・助言の下に記述させる。

- 自分がごんになったつもりで。
- 死んでいくとき、どんなことを考えただろう。・これまで勉強したことのすべてを思い出して書いてください。
- いろいろな思い出が、ごんの頭の中をかすめたかもわからない。

〈教師メモ〉

① 第三次感想文の分析（感想内容については、末尾の〈備考〉(2)を参照）

――「うなずきました」の心情（四年生の場合との比較）――

表①（六年生）

	感想の内質	感想数
肯定的	・うれしい。	8人（25%）
	・満足・悔いはない。	14人（44%）
	・自分がキツネであることを情けなく感じている。	3人（9%）
	78%	
否定的	・誤解しないでほしかった。・苦労が水のあわ	2人（6%）
	6%	
その他	・「わからない」としている。	4人（13%）
	・無関係のことを書いている。	1人（3%）
	16%	
合計		32人

表②（四年生）

	感想の内質	感想数
死を肯定し、容認している	ⓐ うれしい。しあわせだ。とてもよかった。	28
	ⓑ まんぞくだ。こうかいしていない。	22
	ⓒ しかたがない。これでもよい。	22
	ⓓ 自分が悪かった。深くはんせいしている。もっとつぐないをしてあげたかった。	59
	ⓔ 天国で見守っている。お元気で。	21
	ⓕ その他	9
	161	
死を容認できない	ⓖ 死ぬのは無念。いや。	13
	ⓗ 兵十を非難。なぜ、うったのだ。	12
	ⓘ その他	2
	27	
合計		188

表①が、六年生を対象とした本授業、表②が二百人の四年生児童を対象に調査したときのものである。表①で「肯定的」とは自己の死を容認できているの意味で、「うれしい」「満足・悔いはない」等の内容になっている。これが七十八パーセント。すなわち、多くの児童がごんぎつねは満足して息を引き取っている、と読み取っている。

四年生では、これに相当する積極的肯定は表②のⓐⓑである。これは二十五パーセントであり、学年による開きが明瞭である。言うまでもなく、草稿では「うれしくなりました」の表現になっており、原作者の意図は「満足」した最期として終結させることにある。このように比較して考察することで、「四年生らしい」感想の内質が浮きぼりになってくる。（四年生の場合、「死を肯定・容認している」の内質は、ⓐⓑのほかにⓒⓓⓔとして存在し、「死を容認できない」とする内質はⓖⓗとして存在する。）

11　十一月二十日（火）第十一時――第六節（「火なわじゅうをばたりと取り落とし」たときの兵十の心情を考える。）

(1)　学習のめあてをつかむ。

〈この時間に学習すること〉

・　兵十は、ごんの気持ちを理解できただろうか。ごんについて何が分かり、何が分かっていないか。（前時の第三次感想文中、このような問題提起を記述している大沢敬子さんの感想文を読む。）

・　くりをくれたことは分かったが……

1　「いわし事件」のこと。
2　あのうなぎも、ぬすんだのではないこと。
3　ごんぎつねは、どんなところに住み、誰と住んでいたか
……いつも人間の住む村に姿を現していたが……

(2)　第六節を読む。

(3)　フィナーレの二文について話し合う。（グループ）

①　兵十は、なぜ「火なわじゅうをばたりと取り落とし」たのか。↓
ごんがくりやまつたけを持って来ていることを知ったから。

②　（しかし）ごんの「心」は伝わっただろうか。
何日か経ち、兵十はごんのことでどんなことを考えるようになっただろうか。

(4)　「一口感想」を書く。

〈教師メモ〉

――「火なわじゅうをばたりと取り落とし」た兵十の心情（児童の話し合いから）――

①　〈ごんをうった時〉

・　いっしゅん、わけが分らなかった。

・　くりやまつたけを持って来ているのがごんであることを知って、びっくりした。

・　神様じゃあなくて、ごんだったのか！

・　このきつねが、毎日くりやまつたけを持って来ていたんだ。

・　しまった！（はげしい後悔）

・　もう少し、様子を見てうてばよかった。

・　ごんは、どうしておれなんかにくりやまつたけを持って来たんだろう。

・　あのときの、いわし……

・　いわしを持って来たのも、ごんだったのだろうか……

・　このときは、ごんが兵十のことを好きだということはまだ理解できていない。

②　〈何日か経って〉

・　あのくりは、うなぎのつぐないかもしれない。

・　うなぎのつぐないだけで、何日もくりやまつたけをくれるはずがない。おれがひとりぼちになってしまったことを考えて、くれたのだろうか。

・　以前には、ただのキツネだと思っていたけど、おれがひとりぼっちになったから気の毒に思って毎日毎日くりやまつたけをとどけてくれていたんだ。

・　おれがひとりぼっちだということで、どうしてくりやまつたけをとどけてくれるのだろう。

12　十一月二十一日（水）第十二時――兵十はこの事件後、どのように考えが変わり、どう生きて行ったのだろうか。

(1)　ごんがうなずいたときの気持ちを書いた感想文（第三次感想文）の中から、いくつか（増田敬生――「満足だ」、石戸早苗――〈擬獣化〉、阿河政博・樺山さおり――「うれしい」）を読む。（教師）

(2) 学習のめあてをつかむ。

右の(1)の感想文で紹介したようなごんぎつねを撃ってしまってからの、兵十について考えていくこと。

(板書)

1　兵十は、どんな人だったか。
2　兵十は、どうしてうってしまったのだったか。
3　ごんをうってしまった兵十は、その後どのように「生まれ変わり」(第三次感想文中の児童――牧野健次君――の表現)、生きていっただろうか。

(若い時から現在までの数十年間を、どのように生きただろうか。若き日のこの事件――ごんという心のやさしいキツネがいて、自分はすっかりどろぼうだと思い込み、じゅうでうってしまった――は、兵十がそれから先を生きていく上で、どのように考え方を変えさせただろうか。)あるいは、兵十に対してどのように生きてほしいと思うか。

(3) ＜前文＞をくわしく読み、話し合う。(グループ)

① 「私達の小さかつた時、村にゐました」→現在は、もういない。
② 「茂助爺は、年をとつてゐて」→何歳ぐらいだろうか。
③ 「若衆倉」
④ 「私達はよく茂助爺と遊びました」→どんな爺さんか。
⑤ 「夏みかんの皮をむく時の手の大きかつた事だけ覚えてゐます」→なぜ、「手の大きかつた事」が記憶によみがえるのだろう。(「ひなわじゅう」の銃身を握り、引き金を引く指を連想させる?)
⑥ 「若い時、猟師だつたさう」→その後は、長い期間猟師ではない。
⑦ 「私が、次にお話するのは……若衆倉の前で、茂助爺からきいた話なんです」→茂助爺は、どうしてこんな話を語ったのだろうか。

・「ごんぎつね」という話。

(徳山勝也君の第三次感想文を紹介する。→「もう、ごんのようなかしこくて、かわいいきつねはいないと思います。

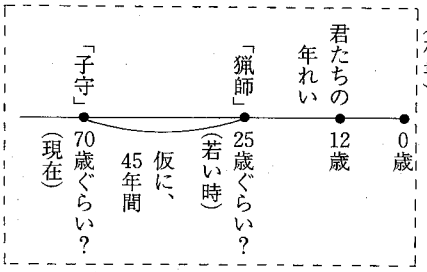
・「ぬすっと」、「悪いやつ」、と決めつけて殺してしまった物語。

(4) 「一口感想」を書く。

＜教師メモ＞

「茂助じいさんは子どもがすきで、とてもやさしい」「茂助じいは、きっと兵十だと思う」というような記述が「一口感想」の中に多く出てきている。

(板書)



13　十一月二十一日(水)　第十三時――「その後の兵十」の題で感想文を書く。(第四次感想)

(1) 学習のめあてを知る。

(2) 前時の＜前文＞の学習を振り返る。

「一口感想」のいくつかを読み、前時の学習を想起させる。

(3) ごんと兵十の心情のすれちがいを想起する。

(板書)

心の中 / ことがら	ごんの心の中	心のふれあい	兵十(村人)の心の中
住んでいる場所・いたずら	・ひとりぼっち。しだのいっぱいしげった森の中。 ・夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかり。	↓ ↑	・困りはてている。 ・憎い。

大雨・川でのいたずら	◦たいくつ ◦「ちょいと、いたずらがしたくなった」（ぬすむためではない。） ◦「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」 ◦いわしをぬすむ。（うなぎのつぐないに、いいことをした。） ◦「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんなきずまで……」	⇣ ↑	•「うわあ、ぬすっとぎつねめ。」 •「いわし屋のやつにひどい目にあわされた。」
いわし事件			
くりやまつたけ	◦「次の日も、その次の日も」 ◦「その次の日には、くりばかりでなく、まつたけも」	⇣	——
神様にお礼	◦「お念仏がすむまで、いどのそばにしゃがんで」 ◦「兵十のかげぼうしをふみふみ」	⇣ ↑	•「毎日、神様にお礼を言うがいい。」 •「きつねがうちの中へ入ったではありませんか。」
その明くる日	◦「その明くる日も、ごんは、くりを持って」	⇣ ↑	•「またいたずらをしに来たな。」 •「足音をしのばせて、近よって、『ドン』。」
バタリとたおれる。	◦うなずきました。 ◦兵十は、火なわじゅうをバタリと取り落としました。 ◦青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。 （点線……一方通行　実線——わかり合える。）	↔	•「ごん、お前だったのか、いつもくりをくれたのは。」

(4)「その後の兵十」の題で感想文を記述する。（第四次感想文）

〈教師メモ〉

① 第四次感想文の分析（感想内容については、末尾の〈備考〉(3)を参照）

児童の感想文を読了し、草稿〈前文〉を教材として読み深め兵十のその後の生き方について考える学習活動を組織したことは、きわめて有意義であったように思われる。（それは、記述内容の豊かさとして表れている。）

ただ、兵十と茂助爺を同一人物とした場合、なぜ名前を変えているのか疑問に感じている文例も少数だが存在した。文学の虚構性を前提とした上で鑑賞することに、抵抗感を残している児童がわずかだが存在していることを推察させる。

14　十一月二十二日（木）第十四時——作品全体をどのように読んだか、批判的に書く。（第五次感想文）

(1)　学習のめあて（感想文を書くこと）を知る。（文題「『ごんぎつね』の学習を終わって」）

次のように板書。（板書のすべてについて記述するというのではなく、そういったことを頭に浮かべながら、自分が書きたいと思うことを自由に記述させる。）

（板書）

①ごんというキツネのこと。

◦　ごんというキツネが、この世の中に生きていた。

。ごんのいろいろな行動。
。ごんの心
②　兵十という人間のこと。
。兵十という人間が、この世に生きていた。
。この事件が起きるまでと、起きてから後の兵十。
③　この物語（事件）について
。どうして、このような悲しいことが起きてしまったのか。
このような悲しいことを避けることはできなかったのか。
自分がごんだったら、兵十だったら、あんなことはしない、こうする、といったようなこと。
。この「ごんぎつね」という物語は、単なるお話の世界のことであって、わたしたちの身の回りの生活や、この世の中のできごととは関係のないことだろうか。
④　その他。
。この「ごんぎつね」を勉強しての感想。（おもしろかったことや、いやだったこと。こうしてほしかったこと、など。）
。そのほか、なんでも。

(2)　感想文を記述する。
(3)　「一口感想」を記述する。

＜教師メモ＞

①　第五次感想文の分析

感想内容については、これを整理して末尾の＜備考＞(4)に収載している。そこには実に豊富な感想内容が横溢しているが、殊に④「『ごんぎつね』の学習について」の項目では、この授業を通して形成された児童の感動や充足感が溢れ、漲っていることを知る。なお、認識の深化・共感・意欲の形成過程に関しては稿を改めて考察する。

四　おわりに

本稿では、新美南吉作「ごん狐」を教材とする六年生での実際の授業について、その概要を述べた。本授業は、筆者にとって小学校における文学の授業の可能性――著名な「ごん狐」においては、小学生児童はごんと兵十の生き方についてどこまで掘り下げて読み深めることができるのか――を追究したものである。

児童の学習活動、反応に関しては本文のとおりである。文学の授業は「感動」形成を柱に実施されるべきであるが、（「感動」形成の少ない文学の授業ではその価値は半減すると考えるものであるが）、この「感動」を「診断」する上で基本的な資料となる感想文については、内容を整理し＜備考＞に付した。

次なる研究課題は、文学の授業で最重要視したい「感動」形成に関し、その過程を分析し考察することである。この点については稿を改め、「『ごんぎつね』の文学の授業（六年）(二)――『感動』形成過程に関する考察――」において追究する。

＜注＞

(1)　西郷竹彦『教師のための文芸学入門』（明治図書　昭和43・10）
(2)　草稿「權狐」の第三節終末文は、「そして權狐は、もう悪戯をしなくなりました。」となっている。このことは、それまでの「生き方」を百八十度転回した新生の人物像を意味しているといえる。なお、草稿のこの一文は南吉が推敲することによって後から挿入しており、そのためにごんぎつねの生まれ変わった姿が強調される形となっている、という指摘がある。（向川幹雄「資料調査余話」＝『校定新美南吉全集』第十一巻＜月報＞大日本図書　一九八一・三）

＜備考＞　感想内容一覧

(1)　第一次感想文および第二次感想文

	感想内容
①ごんぎつね ごんの人物像 ひとりぼっち	第一次感想文
	・中山というところに、どうしてひとりで住んでいるのだろう。（西浦） ・お父さんやお母さん、兄姉・弟妹はいないのかなあ。どうして、ごんはいたずらをするのか。それはたぶん、友だちがいなくてさびしいからだと思う。（藤田）
	第二次感想文
	・ごんは、さびしがり屋だから、いたずらをすると思った。ごんは、かわいそうだなあ。山にはお父さんもお母さんもいないし、それにいっしょに遊ぶ仲間だって、あまりいない。大きないたずらをするが、ほんとうはやさしいんだなあ。（大山） ・いつも、いたずらばかりしているけど、ほんとうは家族も友達もいないから、さびしくて、いたずらをしていると思う。家族や友達がいたら、いたずらなんかしなかったと思う。（木谷） ・いつもひとりぼっちだから、いたずらをして気持ちをまぎらしていると思う。（佐伯） ・ごんは、ひとりぼっちだから、さびしいので、人間を相手にいたずらをして、遊んでいるつもりだと思います。（増田） ・ごんは、ひとりぼっちだから、いたずらをするのかなあ。ごんは、初めからいたずらばかりしていたのだろうか。お父さんやお母さんはどこへ行ったのだろう。ごんがかわいそうだ。ごんは、お母さんから生まれてくるのに、お母さんはそのごんを見すてて行ってしまったのだろうか。（村上（男）） ・いたずらをするのは、ひとりぼっちで、さびしいからだ。だから、兵十を見つけたとき、ついいたずら心が起きて、あんないたずらをしてしまった。（石戸） ・ごんは、いたずらばかりしているけど、ほんとうはさびしいと思う。友だちもいないから、いたずらをしていると思う。村の人からみたら悪いことのようだけれど、ごんにしたら遊んでいるつもりだ。（大沢） ・いたずらばかりして、悪いきつねに見えるけど、ほんとうは心のやさしいきつねで、ひとりぼっちでさびしいから相手にしてもらいたくて、そうしていると思う。（加藤） ・私がいんしょうに残っているのは、ごんがひとりぼっちであなの中に住んでいることです。「ひとりぼっちで、さびしくないのかなあ」とか、「いつからひとりで住んでいるのかなあ」ということを、知りたいです。（鴨谷） ・ごんが、いたずらや悪いことをするのはひとりぼっちでだれも相手にしてくれないからだと思う。村が近いので、ついいたずらをしたくなるのだろう。（倉木） ・ごんは、親兄弟がいなくて、さびしいだろう。かわいそうだ。（藤條）

①ごんぎつね ごんの人物像 ひとりぼっち	いたずら
	・よいきつねか、悪いきつねか、いったいどっちだ。（清原） ・初めの方のごん
	・いろいろないたずらが、印しょうに残った。なたねがらのほしてあるのに火をつけたり、どんがらしをむしり取っていったり兵十の魚を逃したりするなど。なかでも一番ひどいいたずらは、うなぎをとったいた

①ごんぎつね

ごんの人物像

いたずら

は、悪いと思う。うなぎをとったりするから。（頭山）

- ごんぎつねって悪いなあ、と思った。いい所もあるけど、悪い方が多い。（西浦）
- ごんは、なんて悪いんだろう、と思ったけど、あとの方でクリやまつたけなどを毎日のように持って行ったので考えが変わった。（倉木）
- ごんは、いたずらばかりしすぎるなあ。（山下）
- ごんは、悪いやつなのか、いいやつなのか、どっちだ。ぼくは、いいやつだと思っている。（阿河）
- 第一章から第三章までのごんは、だいぶ悪いきつねだ。（北垣）
- ごんの悪いところは、なたねがらに火をつけたり、兵十が一生けんめいにとったキスやうなぎを、はりきりあみのかかっている所より下手の方へ逃がしたこと。（桐山）
- ごんが、うなぎをぬすみとって、下手の方へほったのがおもしろかった。下手の方へ逃がすと、もうそのうなぎはとらえられないからだ。ごんも、うまく考えたなあ。悪知恵の働くやつだなあ。兵十にとってはめいわくなことだけど、読んでいるぼくにとってはおもしろい。（小松）
- 初めの方のごんは、畑へ入っていもをほり散らしたり、火をつけたり、とんがらしをむしり取って行ったり、いろいろないたずらをしているが、ほんとうのごんは、やさしい気持ちを持っている。（頭山）
- 一番、印しょうに残っていることは、兵十がせっかくとったキスやふなを、ごんがはりきりあみより下手の方へ投げこむことです。その部分の文章を読んだとき、「ずるがしこいやつだ」とか、「いたずらがすきだなあ」と思った。（徳山）
- ごんぎつねは、ちょっと悪すぎる。兵十がはりきりあみで取ってビクの中に入れている魚を、はりきりあみの外側に投げすてた。兵十がおっかあに食べさせようと思っていた魚は、全部逃されてしまった。そして、兵十のおっかあは死んでしまった。こんなごんは、きっと悪いことで有名なきつねだろう。（西浦）
- ごんが、なぜいたずらをするかというと、ごんのお母さんや兄さんが殺されたり、つかまえられたりしたからだと思う。（牧野）
- 兵十のお母さんが死んだのを知って、毎日毎日つぐないをした。（赤沢）
- ごんは、いつまで、何回つぐなったら気がすむのだろう。（阿河）
- 最後に、ちゃんとつぐないができたのはいいことだ。（北垣）
- ごんは、うなぎを逃したことを悪いことだと考えて、そのつぐないに、いわしやくりを持って行っている。ほんとうは、心の中はやさしいきつね。（木谷）
- 自分のせいで兵十のおっ母が死んだと思って、くりやまつたけを持って行き、そのほかにいわしをぬすんでまでも兵十にあげようとしたところは、ごんのいいところだ。（桐山）
- ごんは、うなぎをとって、悪かったと思って兵十の家におわびの気持ちで、くりをどっさりと、まつたけも二・三本持って行

やさしさ（責任感）

- ごんぎつねは、やさしいと思う。（桐山）
- ごんは、くりやまつたけを持って行った。やさしいきつねだなあ、と思った。（佐伯）
- いたずらをするけど、やさしいところもある。（赤沢）
- 最初はいたずらばかりしていたけど、やっぱり人思い。（阿河）
- クリやまつたけを持って行ったの

①ごんぎつね
ごんの人物像
やさしさ（責任感）

は、いいことをした。（北垣）

- いたずらをしているけど、ほんとうはやさしい。（うなぎをとって来て悪いと思って、毎日くりやまつたけを持って行ってあげるから）（木谷）
- この話でよいところは、自分のせいだと思いこみ、自分が悪いことを自覚して、おわびにくりやまつたけを毎日兵十の家へとどけたこと。（小松）
- ごんぎつねは、わりといいきつねだと思う。兵十のお母さんが死んだことを自分のせいにして、くりやまつたけをとどけたところが、私はすきです。（大沢）
- いたずらばかりった。なかなか、責任感を強く感じる、いいきつねじゃないか、と思う。（小松）
- ごんぎつねは、兵十のおっ母が死んでから、急にいいことをするようになった。（佐伯）
- 兵十のおっ母が死んでしまってから、ごんのつぐないは始まった。（藤田）
- 兵十にいたずらをして、自分で悪かったなあと思って、すぐにくりや松たけを持って行ってあげている。（牧野）
- ごんは、いたずらばかりしているけど、そのいたずらがとても悪いことだったとわかると、つぐないをするという、ほんとうはやさしいきつね。（増田）
- 兵十のお母さんは、うなぎが食べられなくて死んだんじゃあない、と私は思う。だから、自分の責任でお母さんが死んだと思いこんでいるごんは、本当はすごく素直でやさしいきつねだと私は思う。それに、毎日毎日、兵十にくりやまつたけをとどけているということは、ごんは本当に兵十に対してすまないと思っているからだと思う。（石戸）
- ごんは、すごく責任感の強いきつねだ。多くのきつねの場合、自分がうなぎをとったせいで兵十のおっかあが死んだからといって、毎日毎日くりやまつたけを持って行くだろうか。ごんは、自分の行動について深く考えすぎているところもある。（笠原）

①ごんぎつね
ごんの人物像
やさしさ（責任感）

しているけど、自分もひとりぼっちだからやさしい。（樺山）

- 兵十のおっかあが死んだのを知ると、自分のせいだと思って、いわしを兵十の家に持って行き、兵十がいわし屋にぶんなぐられたことを知ると、今度は気の毒に思ってくりやまつたけを毎日持って行っている。ほんとうに心のやさしいきつねだ。（加藤）
- 私は、ごんが小さい手で、どっさりくりやまつたけを持って来たところを思いうかべると、とてもごんがすきになる。ごんはいわしのことで兵十にめいわくをかけたけど、やさしい。ごんに会えるなら、一回会ってみたい。（樺山）
- ごんが、くりをどっさり拾ってきたことですが、「小ぎつね」だから手は小さいと思うから、どっさりと言っても五・六コぐらいじゃないかなあ。（鴨谷）
- ごんは、ほんとうはとてもやさしい。いたずらをして反省したり、自分のいたずらのために兵十のおっかさんが死んだということを反省して、くりやまつたけを持って行ったりしているのが、いいところ。（倉木）
- ごんは、いたずらばかりするけど、やさしい心を持っている。（藤條）
- 兵十のおっかあが死んだのは自分のためだと思いこんでいるから、ごんはつぐないをしているし、そうしたところが心のやさしいところ。（福山）
- ごんは、ほんとうはやさしいと思う。第

①ごんぎつね		
ごんの人物像		
やさしさ（責任感）	頭がいい	“ごん”の名前・年令
一章のところでは、いたずらばかりしていたけど、第二章のことがあって兵十のおっかあが死んでからは、自分が悪かったと思ってくりやまつたけを持って行った。（松本） • 初めに読んだときは、ごんが兵十のうなぎをとったからおっかあが死んだと思っていたけど、勉強しているうちに、ごんが気にしてかってに思いこんでいるような気がしてきた。（村上㈥）	• いろいろなことを知っていて、頭がよい。（桐山） • 火のつけ方や、そう式のこと、祭り、人の名前までよく知っていて、すごく頭がいい。（桐山） • ごんは、なぜ村の人の名前や家などをおぼえられるのかなあ。頭がいいのかなあ。（増田） • いたずらばかりするけど、頭がいい。（村上㈨）	――――― • 〝ごんぎつね〟の〝ごん〟というのは、新美南吉がつけた名前なのかなあ。それとも茂平（茂助）というおじいさんがつけたのかなあ。あるいは、村の人たちがそう呼んでいたのだろうか。（鴨谷） • 〝ごん〟という名前は、だれがつけたのだろうか。いい名前だ。（石戸） • ごんは、「小ぎつね」と書いているけど「わし」と書いているところもあるので、

①ごんぎつね		
印象に残った場面		
	二・三日降り続いた雨、「あな」の中	川の場面
子どものきつねじゃなくて、中年のきつねのように思える。（福山） • 「なたねがら」に火をつけたりするから高校生くらいの年令なのだろうか。（山下）	――――― • ごんは雨の間、ひまでたいくつしただろうなあ。（村上㈨） • ごんは、あなをほって住んでいる。雨の日には外で遊べないから、あなの中でしゃがんでいる。あなを、もう少し大きくしたらいいのに、と思う。（大沢） • 雨の日に「外へも出られなくて、あなの中にしゃがんで」のところで、小さいあななんだなあ、と思った。（宮本） • 二・三日も続けて雨が降るのは大雨だから、あなの中に水が入ってこなかっただろうか。山の中とはいっても、大雨だったら入ってきただろう。（藤田）	――――― • 「三日もの雨で、水がどっとまし」と書いてあるけど、兵十はこしのところまでしか、水につかっていない。（村尾） • 兵十がとったキスやうなぎを、ごんが川の中に投げこんだとき、どの魚も「トボン」と音をたてるところで、私はどの魚も大きいと感じた。（大沢） • うなぎが、ごんの首に巻きついて、あわてて逃げたところがおもしろかった。（宮本）

①ごんぎつね 印象に残った場面		
川の場面	おはぐろ・葬式	いわし事件
――	――	・兵十がいわし屋にぶんなぐられたのが、印象に残っている。（小松）
・キスなどは海にいる魚なのに、どうしてかなあと思ったけど、川が海の近くなのかもしれない。（山下） ・どうして、魚をゴミといっしょにびくの中へ入れたのかなあ。兵十はそれほど、あわてていたのだろうか。（藤田）	・おはぐろをぬった女性は、今の時代だったらおかしいだろう。（藤田） ・昔は、そう式の時におはぐろをつけていたけど、今はどうしてつけないのだろう。文章では、お祭りの時にもおはぐろをつけていたようだ。（大沢） ・兵十は、病気のときでも、さつまいものような元気のよい顔をしているのかなあ。（頭山） ・おそう式のとき、兵十は白いかみしもを着ているが、わたしのいなかのおばあちゃんのおそう式のときは、いっしょに住んでいるおばちゃんは黒い着物を着て、たびをはかずに、はだしでそう式に出ました。墓地へ行くときには、わらじをはいて行きました。そのあたりは、そのように決まっているそうです。兵十のところと少しにていると思いました。（山下）	・いわしをぬすんであげるのを、兵十は喜ばないと思う。（大山） ・いわし屋のおっさんは、ピカピカ光るい

①ごんぎつね 印象に残った場面			
いわし事件	あなの中での反省	その他	「神様にお礼」場面
ている。（小松）	・なぜ、はっきりしないことを考えたのだろう。（大山） ・うなぎのことは、ごんがかってに想像している。（藤條）	――	・「引き合わない」なんて、おかしいと思う。（石原） ・ごんは、おもしろくないと言った。私も、その気持ちはよくわかる。（笠原）
わしを両手でつかんだと書いているが、手を洗ったのかなあ。（頭山） ・いわしをもらったために、兵十はえらいめに会った。かわいそうだ。（赤沢）	・自分の想像で、兵十のお母さんがうなぎを食べたいと言った、と考えている。（大山） ・ごんは、あなの中で「ちょっ」と言っているが、むかしは「ちえっ」を「ちょっ」と言っていたのかなあ、と思う。（頭山）	・兵十と茂助は、名前はちがうけど、同じ人間だと思う。鉄ぽうを持っているとか、手の大きさで、そういうことがわかる。（清原） ・昔は、山にくりやまつたけがたくさんあったのだなあ。（頭山）	・いたずらばかり

①ごんぎつね		
最後の場面		
原因	ごんの心情	自分の感想
・してきたから、殺された。(石原) ・あんなこと、やらんかったらよかった。(大石) ・なんで、ごんは死ななければならないのか。(藤條)	・知らずにうったから、兵十をゆるすと思う。(阿河) ・ごんは、うたれたしゅん間、どう思ったのかなあ。(牧野) ・ごんは、どんな気持ちで死んでいったのかなあ。(加藤)	・うたれて、かわいそうだった。(赤沢) ・かわいそう。(阿河) ・かわいそう。別に殺すことはなかった。(大石)

※第二次感想文は、前半部分（第１・２・３節）の読み深め学習後に記述されており、従ってこれらの場面については対象範囲外である。

①ごんぎつね	
最後の場面	
自分の感想	
・兵十にうたれたのがかわいそうだった。殺すことはなかった。(北垣) ・ごんは、殺されて当たり前。(頭山) ・最後がかわいそう。兵十にごかいされて、殺されて。(徳山) ・最後に、ごんが兵十にじゅうでうたれたところがかわいそうだった。(増田) ・「ごん、おまえだったのか」のところが、一番印象に残っている。(藤條) ・ごかいされて、ごんをてっぽうでうったところが、かわいそう。(大沢) ・かわいそうだった。(福山)	

② 兵十		
人物像		
ひとりぼっち	人がら（のんき）	
――	――	――
・どうして、兵十のお父さんや、兄弟はいないのだろう。（頭山） ・兵十もひとりぼっち。兵十はかわいそうだ。びんぼうな上に、兄弟もいない。父さんもいない。母さんは死んだ。兄弟は最初からいなかったのだろう。お父さんは病気で死んだか、それとも行方不明かもしれない。（藤條） ・兵十は、けっこんしないのかなあ。けっこんしたくないのかなあ。（阿河）	・兵十は、とてものんきな人だと思った。「はちまきをした顔の横っちょうに、まるいはぎの葉が一まい、大きなほくろみたいにへばり付いて」という文があるからです。（増田） ・「まるいはぎの葉が一まい、大きなほくろみたい」になっている。とても、のんき者に思われてくる。（村尾） ・「兵十が、まだ、いどの所で麦をといでいる」のところで、兵十はわりと無器用でのんびりしているんだなあ、と思った。（宮本）	・兵十がはりきりあみを出して、魚をとって、うなぎなどたくさんとれてうれしく思っていたのに、ごんに魚を逃されたから、がっかりしたと思う。（頭山）

② 兵十		
印象に残った場面など		最後の場面
川の場面	その他	
・川の中で、「ぼろぼろの黒い着物」とあるから、貧しいくらしをしているんだと思った。兵十の顔に、大きな葉っぱがついているのに気が付かないところがおもしろかった。（宮本）	・兵十のおっかあは、うなぎが食べたいといって死んだ。そのとき、兵十はごんをうらんでいたと思う。（頭山） ・兵十も、早くごんがくりやまったけを持って来ていることを、知ったらいいのになあ、と思う。（倉木）	・兵十が、もう少し早く気がついていたら、ごんは火なわじゅうで死なかった。（木谷） ・キツネを殺すことはない。（清原） ・兵十は、もう少し様子を見てから鉄ぽうでうったらいい。（徳山） ・兵十もごんを殺してしまって悲しいと思う。（樺山） ・兵十は、ごんのことをどう思った
※第二次感想文は、前半部分（第1・2・3節）の読み深め学習後に記述されており、従ってこの場面については対象範囲外である。		

のかなあ。(福山) ・兵十は、ごんがきらいなのかなあ。(山下)	

③ 疑問点

・キツネが菜種がらに、火をつけることができるのか。(北垣) ・キツネもうなぎを食べたらよいのに。(清原) ・まつたけがたくさんあるのだなあ。(清原) ・いわしをぬすまれたのを、いわし屋はどうして知ったのか。(清原) ・どうやって、火をつけたりできるのか。(桐山) ・「ちょっ」と言った言葉と、「赤い井戸」のことが疑問。(徳山) ・兵十のおっかあが死んで、ごんが急にいいことをし	・「中山様」というのは、話の筋とは関係がないのに、どうして出てくるのかなあ。(牧野) ・どうやって、菜種がらに火を付けるのか疑問だ。(藤田) ・キツネなのに、菜種がらのほしてあるのに、よく火をつけることができたものだ。(村尾)

だした。なんでやろう。(西浦)	

④ 意欲

・意味のわからないことばが、たくさんあった。(大山) ・二回勉強してもおもしろくない。(小松) ・四年生のとき習ったから、あまりおもしろくなかった。(西浦) ・一度読んでいるので、聞いてもあまりおもしろくなかった。(笠原) ・一度勉強したので、あまりおもしろくなかった。(村上(女)) ・「ごんぎつね」を聞いて、なんとなくうそっぽい感じがする。どんなところがうそっぽいかと言うと、ごんがいわしを盗ん	・これから、まだわからないことや、意味などがわかってくると思う。(阿河) ・四年では気にしていなかった「キス」や「赤い井戸」のことや、疑問に思っていたことが、今度の勉強でたくさんわかってきた。(石原) ・これから楽しみです。(大山) ・ごんは、いったいどういうことになるのか、楽しみです。(佐伯) ・だんだんおもしろくなってきたので、もっと勉強したいと思う。(笠原) ・四年生でやった時は、わりにくわしくやったけど、資料とかは使わなかった。だから、今やっている勉強は資料が多く、いろいろわかってすごくおもしろい。(樺山)

④ 意欲
できたり、くりや松竹を持ってきては兵十の家に置いていったりするところが、きつねがそんなことするのかなあ、と思ったりする。（牧野） ・この話はかわいそうだから、読んだりするのはいや。（樺山）

(2) 第三次感想文――「ぐったりと目をつぶったまま、うなず」いたときのごんの心情――

感想内容	死を容認できる
	うれしい
・最後に、くりを持って来たことが兵十に分かってもらえて、うれしく思いながら死んでいったんじゃあないかなあ。（小松） ・兵十に、くりやまつたけを持っていってあげていることがやっと分かって、ごんはすごくうれしかっただろう。（宮本） ・兵十に、くりやまつたけを持っていってやっていることが分かって、うれしい。（福山） ・たぶん、分かってもらえてうれしかった。（石原） ・兵十と姿はちがうけど、ごんは兵十が好きだった。うなずいたときのごんは「元気でくらしてくれ」と思ったかな。それとも、一言だけ「ありがとう」と言ってあげたかったかなあ。（阿河） ・最後の力をふりしぼって、うなずいたと思う。そして、最後に兵十に分かってもらえて「よかった」と思っている。（鴨谷）	・ごんの一番の願いは、兵十にくりやまつたけを持って行っているのを知ってもらい、兵十となかよくくらすことだった。ごんは死んでもうれしかったと思う。（木谷） ・最後に自分のことに気が付いてくれて、分かってもらえて、すごくうれしかったと思う。ごんは死ぬのをいやだと思うけど、分かってくれて、うれしくて、何となく笑って死んでいると思う。（樺山）

死を容認できる	
満足だ・思い残すことはない	
・満足だ。それを兵十に伝えたい。（佐伯） ・兵十は、やっと分かってくれた。これでいい。（村尾） ・もう、思い残すことはない。（山下） ・かくごの上だ。やっぱり、つぐないだから兵十に殺された方がいい。（徳山） ・うらみはしない。（松本） ・たぶん、こうなると予感していた。これでいい。（藤條） ・後かいはない。（藤田） ・うなぎのつぐないを、ちゃんとすませた。（村上(女)） ・ほぼ、つぐないはできたし、死んでもいいと思っている。（大石） ・うたれて当り前だ、と思っている。（村上(男)） ・じゅうぶん、つぐないはできたので、安らかな気持ちで死んでいける。（赤沢） ・安心して死んでいったにちがいない。（増田） ・兵十に迷わくをかけたんだから、やむを得ない。おれと同じ一人ぼっちの兵十よ、さようなら。（加藤） ・もっと、くりやまつたけを持って行ってやりたかった。いたずらぎつねは、やっぱり死んだ方がいい。（大山）	・あまり悲しくなかったんじゃあないか、と思う。どうせ、生き

死を容認できる	死を容認できない	その他
キツネの姿であることを悲しく思っている<擬獣化>		
ていたって、自分がキツネであるうちは、気にもかけてくれないだろう。それならば、いっそ他の人にうたれて死ぬよりも兵十にうたれて死ぬ方がましだ。でも、今度生まれて来るときは、人間に生まれたい。でも、ごんだって、まったく悲しくないわけではないと思う。その悲しい気持ちというのは、兵十にうたれて死ぬということではなく、自分がキツネだということが悲しいんじゃあないかな、と思う。(石戸) ・今度生まれて来るときは、人間になって生まれたい。(牧野) ・ごんは、うたれた後で、自分の姿はどうしてきつねなんだ、人間と同じ心を持っているのに、姿も人間だったらよかった、と思っている。(倉木)	・誤解しないでほしかった。くりやまつたけを兵十の家に毎日毎日持って行ったことを知ってほしい。死ぬのだったら、少しでも楽に死にたいと思っていただろう。(北垣) ・ごんは、死にたくない、死にたくない、と思っていただろう。なぜかというと、友だちになりたいと思って、毎日欠かさずに兵十の家にくりやまつたけを持って行ったのに、ここで死んだら、今までの苦労が水のあわになってしまう。(桐山)	・(ごんの気持ちとは、無関係のことを書いている。) ・(「わからない」と記述している。)

(3) 第四次感想文――「その後の兵十」――

ア、この事件が起きるまでの兵十・起きた直後の兵十に関する感想内容

感想内容	
・今までのこととか、ごんのこととか、気が混乱してしまった。何か、心の中につきささったような感じがする。(阿河)	

事件直後の兵十の後悔	事件を引き起こしたことに対する非難	その他
・兵十の気持ちとしては、「ごん、すまない。おれは何も知らないで、殺してしまって。」「そして、神様にお礼を言ったりして。」だと思う。(大山)	・「神様のしわざだ」と信じる兵十はアホだ。第一、ひとりぼっちになったからと言っているが、日本中にはひとりぼっちの人はたくさんいるのに、それをいちいちやってられへん。(頭山) ・兵十は、かなり気が短い。(北垣) ・もうちょっと、土間の方を見てからうてばよかったなあ。そのときのごんの行動をよく見てからうてばよかった。(赤沢) ・ごんがいたずらをするのはどうしてか、と心やさしい人であるなら兵十だけでも考えてやり、「さびしいからじゃあないか」と口から言葉が出て来なければいけない。兵十や村人たちは、その点が足りなかった。(藤田) ・くりのことがそれほど不思議だったら、いつも窓からのぞいたらいい。兵十は頭が働かない。(清原)	・兵十には、おじいちゃんやおばあちゃん、親せきの人はいないのかなあ。(藤條) ・兵十には、あまり友達がいないようだなあ。加助ぐらいだなあ。(大石) ・兵十が川でうなぎやキスをとっていたのは、おっ母の最後のためだったと思う。そうでなかったら、ゴンのことに気が付いて、うなぎの一ぴきぐらいあげてやったと思う。兵十はやさしいから。(藤田) ・兵十は、少し「ぼおっ」としていて、正直な人だったと思う。だから、加助が「神様のしわざだ」と言った時、「そうかなあ」と信じたんだと思う。兵十は、中山の山の中まで追いかけたり、探し回ったりしていないから、あまりうらんでいないように思う。(笠原) ・兵十とごんぎつねは、どちらとも気の毒だなあ、と思います。な

ぜかというと、兵十はおっかさんが死んでしまったし、ごんは兵十となかよくなりたいと思っていたのに、その兵十に鉄ぽうでうたれてしまったからです。（徳山）

イ、この事件以後の兵十の生き方に関する感想内容

兵十はどのように生きたか	感想内容
• 兵十がたぶん茂助じいだと思う。兵十は、ごんをうった後、すぐにりょう師をやめたと思う。「ごんのような、心のやさしい動物がいるとは知らなかった。おれは、これまでにもそんな動物を殺していたかもしれない。これからは、そんなことはぜったいしたくない」と思い、りょう師をやめたにちがいない。（大山） • 兵十は、もうりょうしをやめたと思う。子供に話を聞かせたり、みかんの皮をむいてやったりしたと思う。（大石） • 兵十は、およめさんをもらわず、さびしいひとりぐらしをして、ごんのおはかを守ってあげたと思う。生きているものを殺す悲しみを、ごんを殺してしまった時に思い、りょう師をやめて苦しい生活を送ったと思う。（桐山） • 兵十が茂助じいだと思います。理由は、兵十という人から聞いた話だと、何十年も前の話をこれほどくわしく話せるわけがない、と思ったからです。だから、本当に体験した茂助じいだから話せたと思います。茂助じいが、もし本当に兵十だったら、その後りょう師をやめて、年老いたら前書きにもあるように、仕事ができないから子守をしていたと思います。（徳山） • 兵十は、りょう師をやめて、年をとってしまったのだと思う。茂助じいが、きっと兵十だと思う。茂助じいは、ごんぎつねというきつねの物語を大事にしたいから、子供たちに話してやったと思う。（佐伯） • 茂助じいがりょう師をやめたのは、若いころだと思う。茂助じいはごんをうった後で、後かいして、ほかの動物をうたなくなったのかもしれない。（山下） • 茂助じいが兵十だと思う。そして、ぜったいに墓を作って、おっかあの墓とごんの墓をおがんだ。（石原） • 兵十はごんをうってから、たぶんりょう師をやめたと思う。こんなことは二度としたくない、と思ってやめたと思う。（北垣） • すごく後かいし、ごんのおはかも作って、花をあげて、毎日おがみに行った。そして、ごんの気持ちがわかって、今までいたずらばかりしてきたわけがよくわかったと思う。それからも、ごんのことをいつも考えながら、さびしくなるとごんの墓のところへ行って、ごんのことを思い出していたと思う。（木谷） • 兵十はごんをうってからは、きっとりょうしをやめたと思う。ごんみたいなやさしい心のある動物がまだ山の中にいるかもしれないし、そんな動物たちをうったらとてもかわいそうに思い、りょうしをやめたにちがいない。そして、仕事がなくなり、子守りをしていたんだと思う。（増田） • たぶん兵十は、茂助だと私は思う。兵十はごんを殺してから、二・三か月たってからりょう師をやめ、子守ばかりやっていると思う。そして、名前も何か月かたったころに変えたと思う。（笠原） • 私は、ごんに仲間がいたら死ぬことはなかったと思う。それに兵十も、ごんをうたずにいられたと思う。でも、動物でもごんのように「人間の心」をもった動物がいることを兵十は知ったと思う。それから、ごんが死んだ後、すぐにお墓を建て、りょう師もすぐにやめたと思う。（鴨谷） • 兵十は茂助じいで、茂助じいは兵十だと思う。兵十はごんをうった後、深く後悔して、「りょう師」という自分の職業をやめたのだと思う。茂助じいは、南吉たちには自分の名を言わず、変えて話したと思う。（倉木） • 兵十はごんをうった後、ごんのお墓を建てて、毎日おがんだと思

兵十はどのように生きたか	その他
う。それから、だんだん年老いてきて、りょう師もやめ、村の子供たちに若い頃の話をしたと思う。こうして考えていくと、なんだか兵十が年老いていくうちに、だんだん茂助に似てくる。やっぱり兵十は、茂助なのかなあ。(宮本) • 茂助じいは兵十だと思います。兵十は、ごんを火なわじゅうでうった後、すぐりょう師をやめたと思います。あんなにいいキツネを殺した自分には、りょう師をやる資格はないと思っていたと思います。(村上(女)) • ごんをうってしまって、兵十はごんの墓を建ててあげて、りょう師をやめたと思う。ごんみたいに、悲しい事件を起こしてはいけないと思って、やめたと思う。(加藤) • 私は、兵十はぜったいに茂助だと思う。兵十はごんをうってしまった後、ごんの気持ちを分かってやれなかったことで深く後悔し、ショックを受けたと思う。だから、もちろんりょう師はやめただろうし、しばらくは何もやる気はなかったんじゃあないかと思う。それから、何十年もたって、兵十(茂助)が子ども達に何回もこの話をしたのは、子ども達に動物の気持ちを分かってあげて、動物と仲よくしろということを伝えたかったのだと思う。だから、兵十はごんをうってしまった後、心を入れかえて、動物と子供を愛するやさしい人に変わったんだと思う。もしごんが、兵十が子ども達に自分の話をしているのを天国から見ていたとしたら、きっと満足したにちがいない。(石戸)	• ごんをうってしまった兵十は、おっかあとごんが一度にいなくなり、悲しいんじゃないかと思う。(山下) • ごんをうってしまってから、兵十はひとりぼっちで何をして生きていったのだろうか。(村上(男)) • ぼくは、兵十が茂助じいと思うことはどうしてもできない。(村尾)

ウ、この物語を語っている兵十(茂助爺)の思いに関する感想内容

感想内容	どんな思いをこめて、この物語を語ったか
• 茂助じいは、この話を何度も子ども達に話したにちがいない。そして、ごんのようなやさしい動物がいるということを知ってほしかった、と思う。(増田) • 茂助じいが、南吉たちにこの物語を話したのは、いろいろな理由があると思う。 一つめは、動物の中にも心のやさしい動物がいるということ。 二つめは、自分が思ったことをすぐやるということはいいことだけど、悪い場合もある、ということ。 三つめは、むやみに動物をうってはいけない、ということ。 その他にも、もっとあったと思う。 茂助じいは、南吉たちにごんの話をするとき、心の中ではしずかに泣いていたと思う。(倉木) • もし、茂助じいが兵十だったら、どんなに悪いぬすっとぎつねでもやさしい気持ちを持っていることは、人間と同じなのだということを、子供達に伝えたかったのだと思う。茂助じいが兵十ならば、ごんをうって、ごんの気持ちが分かって、りょうしをやめていると思う。(大沢) • 茂助じいは、自分の体験があったからこそ、子ども達に話せた。ぼくは、茂助じいくらいにやさしい人でないと話せなかった、と思う。子ども達にこの話をしている時の兵十は、たぶん「おれと同じこんな体験をさせたくない」と思ったにちがいない。子ども達も、この話を聞いて印象に残ったと思うけど、それだけ茂助じいは真剣になって話した。茂助じいの心の中には、ごんをうってしまってとてもはずかしい、と思う気持ちが強い。(牧野) • 子ども達に、ごんのような「人間の心」を持った動物もいるということを分かってほしかったんだ、と思う。(赤沢)

	どんな思いをこめて、この物語を語ったか
	・茂助じいは、二度と過ちを犯すことのないように、近所の子ども達に語ったのだと思う。茂助じいは、死ぬまでごんのことを思い続けていたと思う。（藤田） ・茂助じいも、動物の気持ちを分かってやろうと思いながら「ごんぎつね」の話をしてやったんだと思う。一つしかない命を大切にしてやることができなかったと思いながら、毎日話していたと思う。（西浦） ・「ごんぎつね」の話は、茂助じいが若いときに体験したことだと思う。ごんをうって、ひどく後かいして、りょう師をやめたのだと思う。茂助じいは、自分が情けなかったと思う。何十年もたってから、自分と同じようなことは子どもたちにしてほしくない、と思いながら話したと思う。私も、兵十の立場だったら、ごんを殺してしまっているかもしれない。「何もわからないで、悪いと決めつけることは、とてもよくない」と思った。（樺山） ・「ごん、ごめんよ」と心の中で言いながら、このお話を子ども達に語っていた。（福山） ・この子どもたちには、このような過ちを犯してほしくない、人の気持ちを深く考える子どもになってほしい、と思って話したと思う。（加藤） ・悪い人でも、必ずいい心を持っていて、動物だってむやみに殺してはいけないことを、子どもたちに言い聞かせたいと思って話してやった。（石原） ・どんなに悪いキツネや、悪い人がいても、よい心だけはだれにもあること、たとえ動物といえ、命だけはいっしょなんだ、ということを伝えたくて何回も何回も子ども達に語ったんだと思います。（阿河） ・兵十が茂助じいだとしたら、茂助じいの心の中にはこのことが一生残っていた。（阿河）

	兵十にとって生涯の思い出
	・兵十は、しあわせだったと思う。ごんに、あんなにたくさんのくりやまつたけや、いわしなどをもらったのだから、最高だと思う。（大石） ・この話は、兵十にとって一生の思い出になっていると思います。（徳山）

(4) 第五次感想文――「ごんぎつね」の学習を終わって――

	感想内容
①事件の回避 ごん なかまがいたら	・ごんがいたずら好きではなくて、山に友だちがいたらこんな悲しいことにはならなかった。（加藤） ・ごんは、なかまがいないのかなあ。父母はどこへ行ったのかなあ。もし、父母がいたら、ひとりぼっちじゃないから、くりやまつたけを毎日持っては行かないと思う。兵十みたいにひとりぼっちじゃなかったら。（阿河） ・もし、ごんになかまがいて、なかまといっしょにくりやまつたけをとどけたら、この事件はさけられたと思う。（笠原） ・ごんが、ごんげん山にいたらこのような事件は起きなかったのに、なぜごんは、あぶない人間の所へ出て来たのかなあ。ごんげん山にいれば、友だちだってできると思う。ぼくがごんだったらごんげん山にいたと思う。ごんは、ごんげん山に何かいやな事情でもあるのかなあ。（木谷） ・ごんに友人がいたら、いたずらなんかしないし、死ぬようなことはなかったと思います。（山下） ・ごんは、とてもさびしかったんだと思う。でも、ごんはふつうのいたずらよりも、少々悪質ないたずらをした。私は、いたずらを少しやりすぎたと思う。（大沢） ・こんなかわいそうな事件になってしまっても、しかたがないと

① 事件の回避	
兵十	ごん
兵十の不注意で起きた	ぼくがごんだったら
• 兵十があの時、先に家の中を見ていたら、ごんは死なずにすんだ。それに、足もとをねらってうち、生け捕りにすればよかったと思う。(木谷) • 兵十がもう少し、落ち着いて、様子を見てからうてばよかった。(赤沢) • なぜ、このことを防げなかったのかなあ。ごんの様子をよく見ていたら、ごんをうつことはしなかったと思う。ごんが、せっかく山でくりやまつたけを拾って兵十の家へ持って行ったのに、水のあわになってしまう。ごんは、いろいろいいことをしているのに、たまらないだろう。(北垣) • 兵十が、もっとごんのことを見ていたら、ごんは死ななくてよかったのに。(大沢) • 私が何度も思うことは、兵十がもう少しごんの様子を見ていたら、ごんをうつということは無かった、ということです。(宮本) • 兵十は、動物を殺すというよくない心を持っている。ごんも兵十も、悪い心を直していっしょに暮らせばよいものを、兵十がぶちこわしてしまった。それが、腹立たしい。何も殺すことはないと何度も思った。(清原) • どうして人間は、動物の気持ちが分らないのかなあ、と思う。(山下) • ぼくは初め、兵十がごんをうったことを当たり前だと思っていた。でも、たしかめもせずにうったことは、やはり許せない。(桐山)	思いました。もし、ぼくがごんだったら、コソコソせずに堂々ととどけると思います。そうしたら、やさしいきつねだと分かってもらえるからです。(大山) • ぼくがごんだったら、くりやまつたけを外に置いて帰る。(佐伯)

① 事件の回避		
兵十		
ぼく(私)が兵十だったら	その他	不可能
• もし、ぼくが兵十だったら、もう少し注意深く様子を見わたして、くりとまつたけを持って来たのがごんではないと分かった時初めてうつ。(村尾) • 私が兵十だったら、いたずらをするのは悪いことだけど、殺したりはしない。(松本) • ぼくが兵十だったら、くりやまつたけを持って来たのはごんだと気付く。(佐伯) • 私が兵十だったら、以前のいたずらのことなんか気にせずに、その場をじっと待って、ごんの様子を見ていたと思う。(宮本)	• 昔の家は、犬を飼っていないのかなあ。時代劇でも、あまり犬は出て来ない。これはおかしい。犬の二・三匹がいれば、ごんが出て来ても犬に追いかけられるはずだ。(頭山) • ごんは天国で、「火なわじゅうでうたれなかったら、兵十となかよくなっていたのに。兵十のバカヤロー」と思っている、と思う。逆に、兵十も「お前が、くりの一コでも落としていたら気が付くから、火なわじゅうでうたなくてもよかったのに。ごんのバカヤロー」と思っているだろう。(頭山)	• ごんが兵十にうたれるのは、さけようのないことだと思う。どんなに、ごんが人間の心を持っていても、ごんがキツネである限りはしかたがないんじゃあないか、と思う。兵十は、ごんを単なるキツネとしか思っていなかっただろうし、なにしろ仕事がりょう師なのだから。(石戸) • なぜ、こんな悲劇が起きたかは、両方ともやさしすぎたからだと思う。そして、この悲しい事件をさけることは無理のような気がする。しかし、この美しい話は、ぜったいに、ぜったいにあってよかった、と思う。(牧野)

不可能	② 自分の周辺や、世の中のこととの関連
・この話が人間どうしだったら、うなぎをとったり、勝手に人の家の中に入ったりするのは、そりゃあ悪いことだけど、殺すなんてことはしないと思う。ごんはキツネだったために殺されたなんて、ごんがかわいそうだ。（鴨谷） ・ごんは、自分が兵十のおっかあを殺したと思って、うなぎのつぐないを始めた。ごんはそのとき、死ぬかくごでいた、と思う。どうせ死ぬなら、一番大好きな兵十の手で殺される方がいい、と思い、いつまでもくりやまつたけを持って行ったのだと思う。（村上(女)） ・ごんは、死ななければならない運命のもとに生まれたのだと思います。（藤條）	・この物語は、自分の身の回りで似ているところがあると思う。ごんは、ひとりぼっちで、さびしがっている。人間の子供でも、お父さんやお母さんが働きに出て、家の中でひとりでるす番をしている者がいる。それに、そのるす番している子供の中には、いたずらをする子や、しない子もいる。そうでなくて、お父さんがいる場合でも、いつも帰りがおそくて家族といっしょにごはんを食べられない子どももいる。（藤條） ・「ごんぎつね」は、単なる話の中のことではないと思う。実際に、いつかまた、必ず起きると思う。たとえ、動物やきつねでなくても。（藤田） ・この話は、身の回りの動物にも人間を思う心があることを、読者に伝えようとしている作品だと思う。（頭山） ・この話は、動物は悪いことをしても心は人間と同じであるので、動物を大切にしようということだと思う。（西浦） ・ちょっと話は変わるけど、昨日、ねこが車にひかれて倒れているのを見た。まだ、生きていた。かわいそうだなあ、とタオルをかぶせてあげた。今日、見たら死んでいた。かわいそうでした。

こんなように、生きているものを殺すということは、残こくだ。ごんも、同じ生き物だ。こんなことを、茂助は言いたかったと思う。（桐山）	③ 作者と作品について
・私は、この話は新美南吉が結核でM子さんと幸せになれない自分と、キツネだから兵十と友達になれないごんとを重ね合わせて書いたんだと思う。だから、茂助という人が子どもを集めていろんな話をしてくれたとしても、南吉がそのまま書いたとは考えられないと思います。きっと、南吉は茂助の話を参考にして、自分の不幸な気持ちをこの物語に表したんだと思います。（石戸） ・この物語は、新美南吉の体験がもとになって、そのまま「ごんぎつね」に変わったと思う。（牧野） ・南吉は、子供の頃に聞いた話をよく覚えていたなあ。小さい時に聞いた話だから、多少は南吉が自分で考えて書いた部分もあるだろうと思います。（徳山） ・新美南吉も、動物の気持ちを知ってあげたいと思う気持ちから、この「ごんぎつね」を書いたと思う。（西浦） ・私は、ごんぎつねというキツネは、やはりこの世の中に生きていたんだと思います。なんとなくだけれども、この話は現実にあった話で、茂助じいが体験したことだと思います。そうすると、茂助じいが兵十と重なってきます。だから、作品の中の兵十もほんとうに生きていた人物だということになってきます。この茂助じいの体験が、悲しくて美しい話だったので、南吉が書き残したんだと思います。（笠原）	・これで、やっとごんぎつねの感想文が全部終わった。感想文は短かかったけど、いい作品が書けたと思います。（阿河） ・この「ごんぎつね」を勉強して、ぼくはとても良かったと思う。ぼくは、できること（内容が理解できる勉強のこと ――筆者注）

④　「ごんぎつね」の学習について

しか集中できないけど、この勉強では一生けんめいになれて集中できた。(牧野)

- 私は、動物と人間が出てくる本はたいてい好きだけど、この話はその中でもすごく好きです。「ごんぎつね」を勉強できて、本当に良かったです。(石戸)
- この「ごんぎつね」は単なる話にすぎないのに、勉強しているときは本当にあったような感じがした。(木谷)
- それにしても、おもしろい物語やったと思う。最後に、兵十に言いたいことがある。「いい心をふやそう!」(清原)
- 「ごんぎつね」を勉強して、四年生のときに学習したよりもずいぶんよく分かった。(倉木)
- 「ごんぎつね」を勉強して、ごんの心の中や作者のことがいろいろ分かった。二度目だけど、思ったよりおもしろかった。(北垣)
- 私は、四年生のときおぼえているのは、ごんはいたずら者で最後がかわいそうだということだけだった。……(中略―筆者注)この勉強をしてよかったと思いました。(宮本)
- 「ごんぎつね」を学習して、四年生のときとやり方がだいぶちがうと思った。四年生のときは単純だった。話の内容はいっしょだけど、今のようにくわしくやっていない。新美南吉が二十九歳で病死したとか、ごんが「ごんげん山」にひとりぼっちで暮らしていたとか、まだ他にもたくさんある。(西浦)
- 今まで勉強してきて、私はおもしろかった。(松本)
- やっと終わった、と思う。いろいろなことが、この物語の中にあった。(頭山)
- 平野(この小学校がある大阪市内の地名――筆者注)にこんな事件が起こったら、どうなるのかなあ、と思った。もっと、長い話だったら良かった、と思う。(大山)
- ごんぎつねと兵十は、たぶん本当にいたと思う。確証はないけど、この物語の中で起きたことは本当のことだと思う。(藤條)
- この物語は、とても美しい話でした。(笠原)
- 「ごんぎつね」の話を、いいと思った。(佐伯)
- この話を勉強しておもしろかったことは、グループで話し合いができたり、他のグループの人の考えが聞けたりしたことです。また、「ごんぎつね」のような話の学習をしたいと思います。(山下)
- 「ごんぎつね」を勉強するようになったとき、「なんで、おれらの組だけ一回やった勉強を二回もやらなあかんのや」と思っていた。でも、何回か勉強しているうちに、「動物も生き物、人間と同じように悪いところもあれば、いいところもある」という気持ちが強くなってきた。でも、心の中でそう思っていても、動物の長所と短所、その中でも短所はよく分かっても長所はあまり分からない。犬や猫などを飼っている家の人でも、自分の家で飼っている動物の長所はあまり分かっていないと思う。だから、兵十の場合も、ごんの責任感の強さという長所を見ぬいていたら、ごんをうたなかったかもしれない。(小松)
- 「ごんぎつね」って、あまりおもしろくなかった。ごんが初めにあんなことするから、こういうことになった。この話の中で、ごんのなかまが出てこないところが、あまりおもしろくなかった。なかまが出てこなかったら、おもしろくない。(大石)
- ごんは、お父さんやお母さんや、なかまと、どうしていっしょに暮らさないのだろう。いつ頃から、ひとりぼっちで暮らしているのだろう。(福山)
- ごんのほんとうの心の中は、さびしくて、友だちになりたくて悪さばかりしてみんなの気を引こうとしていたんだと思う。(藤田)
- 兵十がおっかあとふたりぐらしで、ごんはひとりぐらしだから

⑤　登場人物について

ごんぎつね

境遇「ひとりぼっち」

うらやましがっていたんだと思う。（赤沢）

• 私は、「ごんぎつね」を勉強していろいろなことがわかって来ました。ごんはひとりぼっちで、いっしょに遊ぶ子がいないからいたずらをしていることが分かった。ごんの心の中は、やさしい心とさびしさがある、と思う。（福山）

• ごんのお母さんは、どないしたんかなあ。死んだんかなあ。それとも、ごんをすっぽかして、どこかでお父さんと暮らしてんのかなあ。ごんは、すてられた身だと思う。ひとりぼっちやから、みんなに裏切られたかもわからへん。どうしてごんがワルになったかは、親から見すてられたからだと思う。見すてた親が悪い。ごんが一人になっても、ほっとく親が悪いと思う。ごんは、たぶん小さい時から見すてられていたと思う。だから、畑に入っていもを食べたりしたと思う。畑に火をつけるということは、小さい時から練習せなあかんと思う。ごんは、外面ではいたずらをやっているけど、内面ではさびしい気持ちがうず巻いているからだと思う。うっぷん晴らしにやっていると思う。ごんが悪くなったのは、みんな親のせいだ。みんな親が悪いんだと思う。（清原）

• ぼくは、ごんはだいたい高校生くらいの年齢だと思う。その時期は、体が大きくなる時期だけど、ごんはあまり大きくない。それは、小さい頃からごんはあまり食べ物を食べていないからだと思う。小さい時からひとりぼっちだったから、食べ物の採り方を知らないのだと思う。（中略――筆者注）　ひとりぼっちで暮らしているごんの気持ちが、ぼくにはよく分かる。ごんがなぜ、ひとりぼっちで住んでいるのかは分からない。なぜ、なかまのところへ行かないのか、それはごんにしか分からない。（牧野）

• ごんも、初めはなかまがほしかったと思う。（頭山）

• ぼくは、ごんみたいなやさしいキツネは、これから先、二度と出て来ないと思う。（牧野）

⑤　登場人物について

ごんぎつね			兵十		
やさしさ	満足	〈擬獣化〉	後悔	村人	茂助爺
• ごんぎつねは、神様だったと思う。加助が「そりゃ、神様のしわざだ」と言ったことから考えてみると、ぼくも加助と同じで、神様だと思った。くりやまつたけを毎日毎日持って行ってあげるなんて、まるで神様みたいだ。ふつうのキツネにはできないことで、人間でもむずかしいことだと思います。ごんは、まだ天国で兵十のことを見守っていると思う。（阿河）	• ごんは死んでしまったけど、兵十にわかってもらえたので、喜んで死んでいったと思います。（村上(女)） • つぐないもじゅうぶんしたし、ごんも安らかに天国に行ったと思います。（赤沢）	• 私がごんの立場だったら、自分の動物の姿が憎らしかったと思う。姿さえ人間の形をしていたら、兵十となかよくできたかもしれないのに、と考えていたと思う。兵十から見たら、ただのキツネにしか思えないのは、とても悲しかっただろう。（倉木）	• 茂助じい（兵十）は、もうこれからはこんなことがないようにぜったいに火なわじゅうを手にすることはなかったと思う。（阿河） • ごんが死んだ後は、兵十は二度とキツネを殺したりしなかったと思う。それほど、深こくに後かいしていると思う。	• 村人たちはいたずらぎつねがいなくなったので、ほっとしているかもしれないが、反対に何だかさびしくなったと思っているだろう。（宮本）	• 茂助じいさんのような人は、若い時のあやまちがあってこんな人になれると思う。この話は、スッと読むとただのお話だけど、

ちゃんとくわしくやったら、すごく深い意味がある話だと思った。
（樺山）

〈付記〉

この論文は、平成元年八月三日に、全国大学国語教育学会（茗渓会館）にて本題で発表したものを骨子にして作成した。

（平成元年　十　月　五　日受理）
（平成元年十二月二十七日発行）